

## 速記法におけるドイツ語草書派理論の成立と他言語への影響 ～シュンペーターの速記解読事業を糸口に～

The establishment of the German cursive letters-based shorthand theory and its impact on the development of the shorthand systems in other languages.

兼子次生

KANEKO Tsuguo

### アブストラクト

偶然、有名な Joseph Alois Schumpeter の速記メモに巡り会い、彼の「資本主義・社会主義・民主主義」"Capitalism, Socialism and Democracy" (CSD) 遺稿研究の一端を担う機会を得た。彼が書いた速記が、ドイツで完成された草書派 Cursive school の始祖、ガベルスベルガー式 Gabelsberger system であることを知り、そこから派生した方式が幾つかの経路をたどり漢字文化圏の日本、中国へ影響を与えたことがわかった。本論において、まずシュンペーター遺稿集のデータと出版物に収められなかった速記符号データを含む全資料の整理と電子データ化作業について報告し、次にガベルスベルガー式速記法の発生と理論を述べ、最後に日本語、中国語、朝鮮、インドネシア語へ及ぼした影響の報告に及ぶたい。

### Abstract

I was lucky enough to run across Joseph Alois Schumpeter's shorthand notes, which gave me the opportunity to participate in the research on his posthumous work, "Capitalism, Socialism and Democracy" (CSD). It turned out that Schumpeter took down notes by Gabelsberger shorthand. It got me interested in studying the cursive letters-based shorthand theory and its influence on other cultural spheres such as East Asia — Japan, China, and Korea, as well as Euroasia. In this paper, I will report the procedure in which we classified and digitized the data from both the collection of Schumpeter's posthumous works and those which were not included in the collection. It will then discuss how Gabelsberger shorthand was developed and theorized and how it influenced the shorthand systems in Japanese, Chinese, Korean and Indonesian languages.

キーワード：速記、草書派、ガベルスベルガー、シュンペーター

# 1. シュンペーター遺稿集研究とその電子データ化について～Schumpeter 手稿における速記符号研究～

## 1) はじめに

社会経済学者のシュンペーターはCSDの執筆過程において着想、取材メモ、執筆原稿の一部にドイツ語のガベルスベルガー式速記法を用いた。それらの執筆材料が1985年2月、三重県津市で発見されていた。その研究をもとに、浦城晋一（三重大学名誉教授）らによってCSD補遺稿・章句集が出版された。研究の最大の障壁は、シュムペーターが書いた速記メモの解読にあったが、筆者が東西ドイツの速記研究者と連携して東ドイツに解読者を探し出して解読(反訳)が実現した。浦城らの出版が完了したのを受けて、その成果を公開する段階に至ったので、その経過を記録にとどめる。

## 2) 概要

この研究を志した浦城は、シュンペーターのCSD遺稿・章句集の研究戦略として最初に、刊行本に含まれなかった章句のすべてを解明して内容を再構成する方針を決定した。

CSDは、1942年初版が出版され、第二版は1947年に「第二次世界大戦の帰結」を加え、さらに第三版では「その後の戦後展開の注釈」として2つの小論文（「イギリス第三版への序文」、「社会主義への前進」）を付け加えている。それらの執筆にかかわる遺稿資料は合計1,188枚があり、浦城は(A)自筆原稿、(B)黄色用紙に鉛筆で書いたメモ(図1、約300枚)、(C)タイプ打ち原稿の3種類に分類した。そのうち(A)自筆原稿のうちの約60%を占める部分が「CSD」第一版(1942年版)の内容の約80%をカバーしており、これを(Aa)と呼んで、その残り(Ab)は刊行本と一致しないものであったとした。(B)黄色用紙の資料は照合すると、約半分が(A)と重複しており、刊行本の内容と一致し、(Aa)がカバーしなかった部分を裂け目なしにカバーしており(Ba)と分類した。(B)の残りを(Bb)としそれは刊行本の内容と一致しない情報である。(C)のタイプ打ち原稿は相当部分が(A)と重複していると判断した。<sup>\*1</sup>

浦城にとり自力で不可能な(B)の黄色用紙の速記メモと、自筆原稿に書き込まれた速記メモの解読がこの研究の成功を左右する課題であった。彼が読めない速記メモはシュムペーターの本音を含蓄する情報であり、また自筆草稿の一部分にある速記符号、ドイツ語、英語混用の部分は思考を整理する情報であると仮定した。



浦城晋一



兼子次生

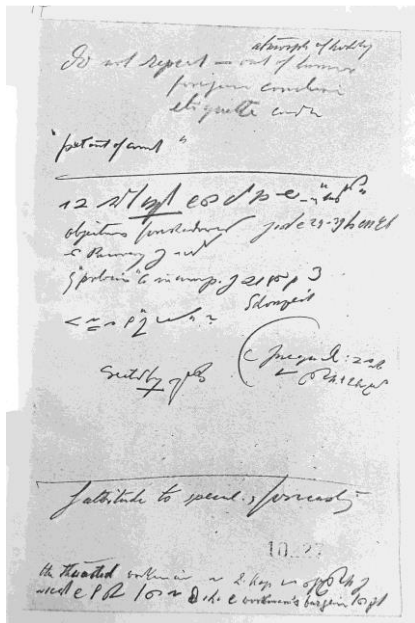


M. ケーラー



A. ハイム

図1 オレンジ色のメモ用紙に書かれた速記符号 (GSD 電子データから)



浦城は幾つか試みをしたのち、幸運にも鍵となる人物の一人として筆者と知己となる機会を得たという。すなわち 1986 年ごろ、筆者は浦城から解読の依頼を受けてサンプル文を受け取り、自身での解読は不可能だが、東ドイツのケーラー Manfred Kehler と西ドイツのヨッケムス Helmut Jochems へ照会した。シュンペーターがオーストリアの学者で、日本の経済学研究者間ではその速記方式をオーストリー式と呼んでいたのち、筆者はファウルマン式速記法の可能性があると見た。両ドイツから来た第一報ではシュンペーターが書いた速記符号はガベルスベルガー式速記法であり、ドイツでは 1924 年同式をベースにしてドイツ統一速記法 Deutsche Einheitskruzschrift=DEK が成立して移行しているため解読できる人材がほとんどいないとの

回答を受けた。

1 年半余が経過したのち、ケーラーから筆者へ元東独議会速記者のハイム Arthur Heym が解読の可能性を持つとの連絡があり 1988 年 3 月 15 日、筆者は浦城へ協力者の出現を報告した。浦城がケーラー、ハイムへ連絡をとり、サンプル文の解読結果を見て可能性が確認されてシュンペーターの速記符号解読作業が始まり、浦城は「障壁は 1988 年に完全に取り払われた」と宣言した。速記符号は 1988 年から 1991 年にかけて解読を終えた。その間、1990 年 10 月 3 日に東西ドイツの壁が崩壊していた。

発見された当時、シュンペーターの資料はページ番号がついた状態ではなかった。浦城は、解読された速記文を刊行本（英語版 425 ページ）の内容と合わせるとともに、またその他の自筆原稿のどの部分と関連する記述であるかを 1,188 枚全部について検証した。

浦城が研究した資料は刊行本、手書き原稿、タイプ打ち原稿、黄色の紙に鉛筆で書かれた速記符号であり、シュンペーターはドイツ語の部分にガベルスベルガー式速記法で筆記し、英語部分では専門語は略語を用いるとともに、ある草稿は英語で書かれ、あるいはドイツ語で書かれ、そこにイタリア語、フランス語、ラテン語が混じる状態であった。

浦城は補遺稿集の原文版をつなぎ合わせて内容を再構成して編集するとともに、日本語に翻訳した。その完了を受けて、2014 年、浦城の古い友人、今井克彦（元大阪大学教授）が副編集を引き受けて本づくりの全作業を分担し、2015 年秋に私家版としてようやく日の目を見た。30 年余、学問領域、国境を越えての善意の日独協力が成果をあげた。

浦城が行った補遺稿集に再構成したシュンペーターの思想については、今井が私家版のデータを三重県立図書館のウェブサイトで開催している。

筆者は、刊行本、私家版を除いて、浦城が編集した自筆原稿、タイプ原稿、速記メモ、

日本語訳のデータを整理してすべての電子化を 2016 年 7 月 31 日終えた。電子化に当たっては、浦城が執筆した原語版とそれを翻訳した日本語版のデータを加えている。巻末に、歴史年表や文献、さらに関係者間で交換された書簡類、兼子次生の手帳、「J.A.Schumpeter”Capitalism, Socialism and Democracy“の Manuscript の存在と由来」から作成したクロニクルを付す。

### 3) 得られた課題

欧州では中世、速記が知識層のリテラシーとして用いられていたが、産業革命の始まりとともに、速記とタイプライティングが秘書のスキルとして普及した。ドイツにおいては国民皆速記の認識のもとに速記の大衆化が進んだ。1887 年に第 1 回が開催されたインテルステノは速記とタイプライティングの国際会議として機能してきた。シュンペーターの速記解読の日独協力はこのインテルステノの場で実現した。

今回の活動の反省の第 1 点は、编者自身が必要と感じなかった速記符号情報である。速記メモとその解読結果の回答は当然番号でつながれていたが、编者は内容を再構成する際に、番号情報を切り取っていたため、速記符号と解読文のリンクが切れた状態にある。シュンペーターの速記符号を解析する上で、オレンジ色のメモ用紙の符号と解読の関係については手作業で確認しなければならない。幸い、ガベルスベルガー式速記法の綴りは規範化されているので、過去の文献を参照しながらある程度可能である。その場合、ハイムの解読が完全に行われていない箇所、浦城が内容を吟味して付した訳については速記符号と関連づけることが難しいと言わざるを得ない。もう 1 点都合がよくないのは、浦城が整理したマニュスクリプト、速記解読文の順番が、入力作業中に乱れており、全情報を整理する際に最初の完全にそろえられた状態に復帰できていないことがある。これらを今後の取り組みへの反省点として挙げておきたい。

速記符号は「ピープスの日記」においては第三者に読まれることを期待しない秘密文字であった。しかし、シュンペーターの速記符号は内言のようではあるが、やはりみずからの専門領域の話題について思考する過程で書かれた、活字となることも予想される文字であった。シュンペーターは講義の際も、オレンジ色のメモ用紙を持ち、学生の質問、意見を絶えず書きとめて、自室や自宅に帰ったあと、整理していた話は有名である。

泉のように湧く発想はリアルタイムに固定しないと、再現できない。シュンペーターは高速の第二の文字として速記を子供のころから愛用していた。手稿を見ると、ドイツ語部分はほぼガベルスベルガー式速記法で書かれている。速記は当時、インテリゲンチアのリテラシーであり、ニュートン Isaac Newton (1642.12.25-1727.3.20)、マックスプランク Max Karl Ernst Planck (1855.4.23-1947.10.4)、マックス・ウェーバー Max Weber (1864.4.21-1920.6.14) らが用いていた。今後、ある分野で著名な業績をあげた研究者が用いた速記ノートが発見され、それが解読し得たとしたら、研究者にとって極めて価値のある史料となるであろう。そのような典型的な経験であった。

筆者は現在、やはり速記で書かれた歴史史料を解読する要請を受け、速記研究者を動員して取り組んでいる。依頼主の研究者は速記による史料がこれからも発見される可能性があると言う。速記文化を検証する点においても、その方式を操る速記者がいなくなった速記ノートの解読は困難である。そのために、筆者は浦城が公にしなかったガベルスベルガー式速記法の速記符号と解読データを後世に残すことにした。3点目の課題として画像認識処理技術によってガベルスベルガー式速記符号の文字認識データベースを構築する研究が今後に残されている。

## 2. ガベルスベルガー式速記法の成立と理論の概要

### 1) ガベルスベルガーの経歴

初めにガベルスベルガーという人物について生い立ちをみておきたい。彼は、フランツ・クサフエア・ガベルスベルガー Franz Xaver Gabelsberger といい、1789年2月9日、ミュンヘンに生まれ、1849年1月4日没した。彼は小さいころに楽器職人の父が亡くなり祖父母に育てられた。その後、ハーグの養父に引き取られ、美声を認められて彼は帝国神学校へ入学させられた。そしてグレゴリアン少年唱歌学校に入ったが、声変わりして退校した。彼の家は資産が乏しく、また虚弱な体質で、家計を支えるために苦勞したが、バイエルン王国の養育院や自治団体で筆耕日雇い人として職を得た。筆耕に才能があった様子で、1813年には中央養育院会計課の書記に昇進した。

1817年、彼は最初の企て短縮速記術 Art Verkürzte Kurzschrift の試案をつくり(図3)、翌1818年に改良を加えている。(図4)最初のアルフアベットと、それをうたいたいガベルスベルガーの名前の綴り(図2)が今日、残されている。それらは萌芽的とはいえ、ドイツ文字の筆記体の一部分を取り出していた。翌年の改良アルファベット(図4)は、明らかに草書派の思想であった。このころは、速く書ける新文字としての機能を備えていた。



Xaver Gabelsberger

図2 筆記体文字で書いたガベルスベルガーの署名

(Lebendige Kurzschriftgeschichte, p. 96.)

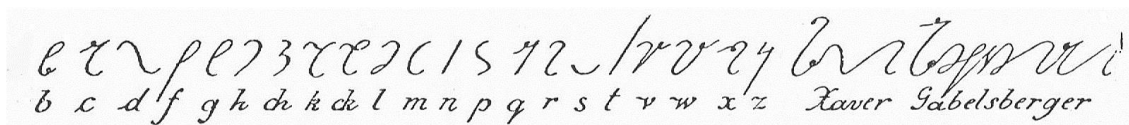


図3 ガベルスベルガーが最初に考案した速記符号 (1817.3 Johnen)

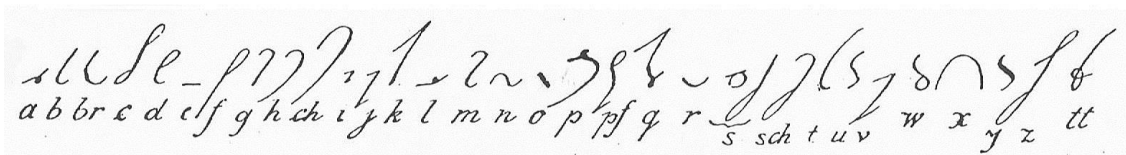


図4 ガベルスベルガーが翌年改良した速記符号(1818, Johnen)

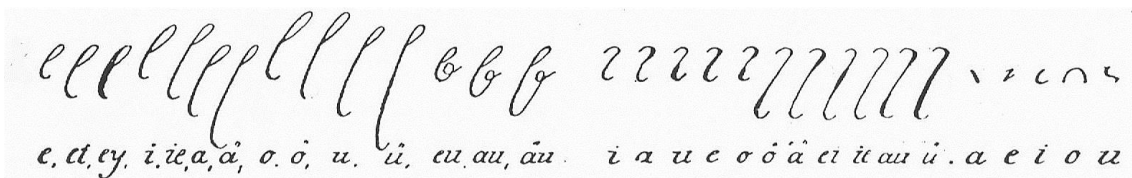


図5 ガベルスベルガーが初期の母音の表現方法(1817, Johnen)

それらの早期の符号で、彼は線分符号 *stroke* を二倍長に変化させることや、母音表象のために子音ストロークのある位置に筆圧を加える方法を考えたことがわかる。(図5)

会議の筆記に長じた彼の能力が認められ、1823年にはバイエルン王国内務省第二会計課の秘書官に任命された。バイエルン議会で速記実務に従事しながら後進を育成し、実践を通じて速記法の完成に心血を注いだ。1829年、その理論をバイエルン議会、ミュンヘンの大学で実際に用いて、彼は実用性を確信した。よく出現する音に対して、書きやすい符号を与える工夫を凝らして完成した高速度理論は1834年、「ドイツ語演説用筆記法、すなわちステノグラフィ入門」として公にされた。<sup>\*3</sup>

優れた後継者を多く育成し、政府の後援も得て、ドイツで速記が国民の教養となる下地がつくられた。周辺国にも翻案され、ブルガリア、チェコ、デンマーク、ハンガリー、イタリア、スウェーデンなど、多くの国に草書派速記が誕生していった。彼は後継者に恵まれ、母音の書き方などにおいて、シュトルツェ Wilhelm Stolze (1798.5.20-1867.1.8)、シュライ Ferdinand Schrey (1850.7.19-1938.10.2)、ファウルマン Karl Faulmann (1835.6.24-1894.6.28)らが改良に努めた。<sup>\*4</sup>

## 2) ガベルスベルガーを始祖とするドイツ草書派速記法の思想と理論

ドイツ草書派の始まりはガベルスベルガー式速記法であったが、英国で確立されていた幾何派とは、子音と母音の表記法が大きく異なっている。ガベルスベルガー式理論では今日の母音表象法 *Selbstlautandeut* と母音表記法 *Selbstlautschreib* の2つの着眼が内在していた。前者は母音の存在を前後の子音符号を利用して暗に示す方法であり、後者は母音自体を符号として筆記するという技法である。ドイツ語は閉音節の構造であり、子音は2つ、3つ連なることがあって、表記は音素を単位にラテン文字を用いている。

これらは、日本語が開音節の構造をとり、音節単位の文字を用いており、基礎符号の構

成が異なっているため日本の速記家には理解が難しい部分である。また、ドイツ語では言葉は語幹に接頭辞、接尾辞やほかの単語などが接続されて、しかも語長が英語、フランス語に比べて長くなる特徴がある。このような言語の特徴から、英語速記法、フランス語速記法に見られる幾何派の子音、加点母音の基礎符号もドイツ語の音表記に必ずしも適していないことを指摘できる。

また、言語に用いられる文字の筆記体の運筆の特性がその言語の速記符号を筆記する上で、少なからず影響を持つ。草書派が成立する以前にドイツにはラテン語、英語、フランス語の幾何派速記理論の影響があり、初期にはそれらをドイツ語に翻案する営みが企てられた。しかし、ドイツ語の筆記体は英語やフランス語と若干違った草書的な筆法が発達していた。そのため幾何派から速記法を採り入れる上で、しっくりいかなかった。

会議の発言をすばやく筆記する特技を持つガベルスベルガーは個人的にドイツ筆記体の一部を取り出して発言を記録する方法を仕事上で工夫して用いていた。

近代速記法の草書派は幾何派と同様、言葉を音の列として速記符号を筆記する表音主義に基づいている。しかし、幾何派の書記規則に支配されると、必ず書きにくい単語が生じるリスクは、草書派においても避けることができない。そこで、ガベルスベルガーは書きにくい符号列を書きやすく補う部分適応的な速記理論を経験的に立てていた。それは例外を多く生み、学習上負担がふえ、それゆえに後継者の方式改良がつきまとうものであった。

一方、速記を言語文化の一部として考えると、方式乱立はリテラシーの点から問題がある。ドイツにおいては国民が速記を共有する教養、リテラシーと見る評価が強かった。その視点から、速記を普遍化する方針が決定され、関係者がガベルスベルガー式速記法をベースにして、シュトルツェ・シュライ式速記法と融合し、**Deutsche Einheits Kurzschrift DEK** を開発するプロジェクトが行われた。この思想は、近隣国にも影響を与え、ソ連にも広がった。

### 3) ガベルスベルガー式速記法の理論構成

文字派、幾何派、草書派各速記法における筆記理論体系には共通の手法があることは、ある意味で速記が言語を超えた普遍性を持つことを示している。草書派理論が完成され、幾何派と同様、高速度速記、逐語速記となり得ることを証明したのは、ドイツ語におけるガベルスベルガー式速記法であった。外見が簡単な符号を用いて、見える図形が少なければ少ないほど高速度を実現できるという幾何派の思想に対して、音素を示す基礎符号は、見た目は複数の図形要素を持つものの筆記上の負荷は少なく、巧みな縮記理論、略記理論によって総合的に負荷を抑制する視点に立つのが草書派である。(図6) 日本語においても表音文字の片仮名は見た目では平仮名よりも簡単で速く筆記できるようにも見えるが、実際にはあまり差異がない。



図6 ガベルスベルガー式速記法の最初の筆記体(1817.3, *Lebendige Kurzschriftgeschichte*, p.97.)

ガベルスベルガー式速記法の理論は、基礎符号と、音を簡単に示す縮記法、音を略して示す略記法、そして言葉、句、節を簡単に示す略語から成り立っている。



図7 ガベルスベルガー式速記法のアルファベット(1834, *Lebendige Kurzschriftgeschichte*, p.45.)

ガベルスベルガー式速記法(1834年版)の基礎アルファベットをみると、基礎符号は子音と母音から構成され、子音は単子音と複子音から構成される。単子音は20あり、その内訳は、b,c,d,f,g,h,j,k,l,m,n,p,q,r,s,t,v,w,x,zである。(図7)速記理論は個人用から商業通信用、専門速記者用に至るまでの3課程が用意され、学習量は用途に比例して次第にふえるようにした。複子音は二重子音、三重子音、四重子音、五重子音、六重子音がある。”*Lebendige Kurzschrift geschite*”(Dr.F.Moser und Dr.K.Erbach)によると、二重子音は7、三重子音は1、四重子音は2となっている。その内容として ng,ch,cht,sp,st,tsch,rr,ss,mm,ff,tt,pp,ck,tzが挙げられている。(図8)一方、“*Art und Bau der wichtigsten Kurzschriften*”(S.Jaenicke,H.-Karpentein)によると、二重子音89、三重子音40、四重子音25、五重子音6、六重子音1が収録されている。



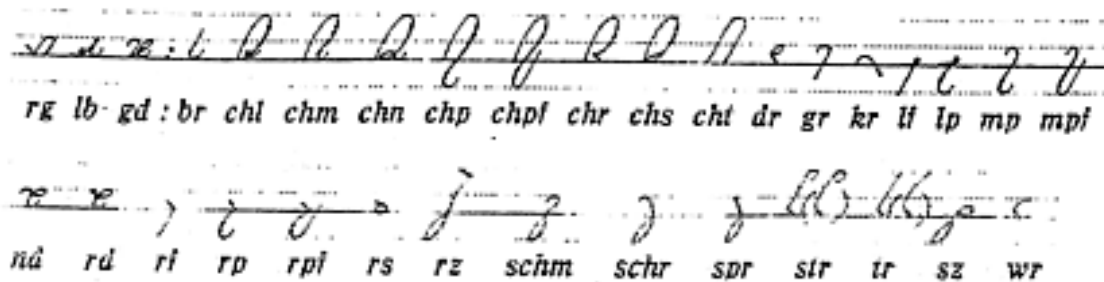
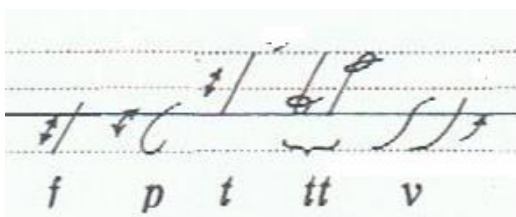


図8 ガベルスベルガー式速記法の多子音符号 (1834, *Lebendige Kurzschriftgeschichte*, p. 45.)

子音はドイツ筆記体文字の一部分を取り出してつくられており、幾何派のブロック体とは異なり、流麗な書線から構成される。そのため筆記体 **Script** 派とも呼ばれるが、草書 **Kursiv** 派と称することが一般的である。

草書派には幾何派に比較して直立、右下に向かう角度の長線符号がなく、左下から右上へ向かう、右上から逆の左下へ向かう線が多用され、それゆえ斜線派とも称される。同じ方向へ向かう線が続くと、「ずり」と呼ばれる、基本線から大きく外れる書線は忌避される。そこで、ガベルスベルガー式速記法では **f**、**p**、**t(st)**、**v** の符号に関しては上方にも下方にも書いて可とする。(図9)



双方向符号 (ガベルスベルガー式速記法)

図9 初版ガベルスベルガー式速記法に用意された双方向符号

(1834, *Lebendige Kurzschriftgeschichte*, p. 45.)

ドイツ語の草書派では、母音の扱いが幾何派と異なる。その起源はガベルスベルガー式速記法にあり、独立形の符号は **ä**, **ai**, **e**, **ee**, **ei**, **i**, **o**, **ö**, **u**, **au**, **äu**, **eu**, **ü**, **y** が設定されている。(図10)

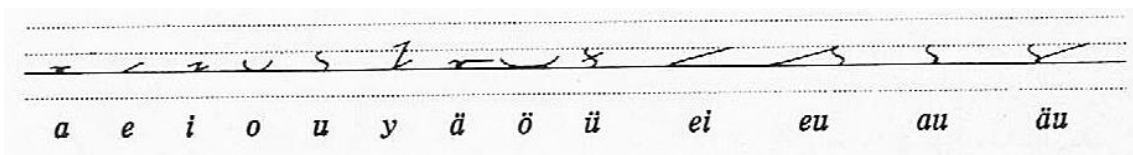


図10 ガベルスベルガー式速記法の母音符号 (*Lebendige Kurzschriftgeschichte*, p. 45.)

また、ガベルスベルガー式速記法では、筆記帯域は基本線を符号筆記の起点の中心線とし、上段線 **Oberelinie**、最上線 **Obere Schriftgrenze** を置く一方、基本線の下に下段線 **Untere Schriftgrenze** を置き、合計3段で筆記帯域を設定している。基礎符号は筆記され

る位置、角度、長さがこの 4 つの線で区別できるようになっており、学習過程で正確に身につける。しかし、実際に筆記する際にはこれらの 4 線がない速記用紙を使用する。最初の速記符号は基礎ライン Grundlinie を起点にして筆記し、単語ごとに分ち書きすることが原則である。(図 11)

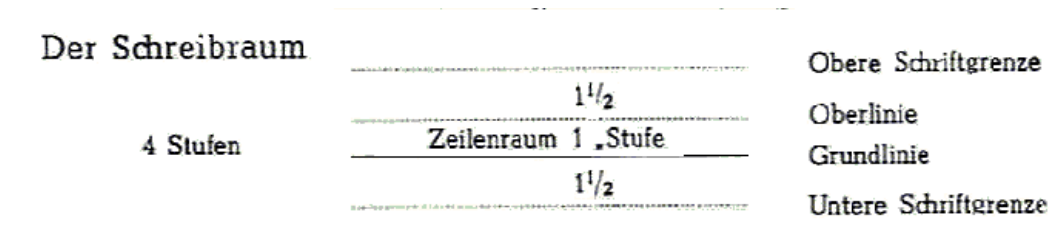


図 11 速記符号は決められた筆記レーンを守る必要がある (Art und Bau, p. 55.)

母音表記法は、半草書派では連続形のサイン符号が用いられ、幾何派では不利な離筆を伴う加点、サイン符号で設定されるが、ガベルスベルガー式速記法では子音と結合する際、後続子音を濃線化、あるいは長線化、基本の独立形の方法の使用を母音ごとに設定してその母音をあらわす。

綴り書きする規則としては、最初の符号は決められたゾーンに置き、続く符号はその前字末から筆記する。以下に、速記符号の綴り例を示して説明する。



図 12 ガベルスベルガー式速記法の音素符号の例 (Art und Bau, p. 57.)

上図 1 2 の速記符号を綴ると、次のようになる。

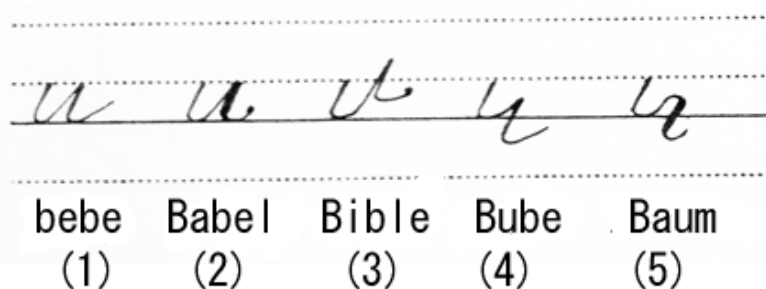


図 13 ガベルスベルガー式速記法の母音の筆記例 (Art und Bau, p. 57.)

母音符号は言葉の中で出現する位置によって書き方が異なる。つまり、母音の基礎符号は言葉の一番初めの「頭音」に出現した際に用いる。尾音つまり子音のあとに出現する場

合、/e/は単純に接続する。(上図 1 3 (1))、一方 /a/は次の子音を濃線化し(上図 1 3 (2))、/i/は前の子音符号の字末を高く上げ(上図 1 3 (3))、/u/は低く下げ(上図 1 3 (4))、/au/は次の子音符号を濃線化する(上図 1 3 (5))、という語末音規則の支配を受ける。

速記符号を1つずつ分けて書くと、それぞれの符号のつなぎ目に空間が入るため、実は見えない線を書いていることになる。その間、むだなエネルギーを費やしている(離筆の不利)ほか、符号が崩れるリスクがあり、単語を一筆で書き綴ることを筆記原則とする。

また、発音どおりに筆記する表音主義に基づくとしても、言葉の表記には規範形があるので発音に揺れがあっても、書かれる速記符号は実際にその標準語形をあらわすという表語機能を持つ。

さらに速記は速く話される音声言語を発現とともに時間の遅れなく固定する速度的な機能を求められる。一般に、速記符号は連続する際、書き崩れたり、綴りにくい符号の組み合わせがあり、そこで、よく使用される言葉は略語が設定される。その場合、音声に関係のある符号を取り出して略語に設定することが表音主義理論では原則になっている。ちなみにガベルスベルガー式速記法では1902年版において略語は約200語を設定している。個人用途の速記理論においてはこれらの略語は設けず発音どおり忠実に筆記するスタイルと、必要最小限の略語にとどめるやり方と、さらにプロフェッショナル用の高速度型では略語を多く設定するやり方と、あわせて3種のスタイルがある。

このような略語は使用するスタイルに対応して多くが設定され、それらは規範として拘束力を持つ。この規範化されているという点において、筆記された速記符号は同じガベルスベルガー式速記法を習得した者同士で読むことがかなりの程度で可能であり、コミュニケーションの一つの媒介 media であった点が特徴的である。ただ、ドイツとオーストリアでは速記符号が若干違っていたので、1で取り上げたシュムペーターの速記符号が解読できないケースがあった。

また、ウムラウトのついた母音にもそれぞれ表音符号を与えていた。

### 3. 草書派速記理論の発生

#### 1) 速記史の時代区分

世界の速記文化を歴史的に見るための時代区分を試みる。速記の発生、発展、普及、衰退はすべての言語に共通ではないが、それらを統合して第一期「古代から中世初期」(紀元前-15世紀)、第二期「中世後期から近世」(16世紀-18世紀)、第三期「近」(19世紀-20世紀)、第四期「近現代」(20世紀)、第五期「現代」(21世紀)に分ける。

##### 【第一期】 古代から中世初期(紀元前-15世紀)

紀元前ローマで成立したティロの速記 Tironian notes がラテン語の変化から次第に衰退し中世に発見されるまで、タキグラフィと呼ばれる手書き文字を用いる表語理論の時代。

## 【第二期】 中世後期から近世(16世紀－19世紀)

イギリスにおける速記ルネサンスの発生、手書きによる表音主義の時代。符号式速記法の近代理論が発達し、幾何派、草書派、半草書派が完成した。速記は知識層のリテラシーから裁判、議会における発言記録の作成へ用途が広がった。

## 【第三期】 近代(19世紀－20世紀)

手書き速記の高速度理論が完成し、またタイプライターが実用化され、欧米諸国において速記利用が拡大した時代。ビジネス秘書の技能としての速記が普及、また議会制国家において公式の逐語会議録作成や裁判における発言記録を作成するために各国語の高速度速記理論が完成された。草書派、半草書派が派生し、完成された。

## 【第四期】 近現代(20世紀－21世紀)

磁気録音技術の普及とともに、速記代替技術が発達、普及した。この期に欧米の逐語公式記録市場で機械速記が手書き速記を駆逐し、一方、リスピークと録音を組み合わせたボイスライターが登場した。さらにCAT(電算支援反訳)を備えた電子機械速記において情報通信技術の利用により可能となったリアルタイム反訳がテレビ生字幕市場を創出した。リスピークによる音声認識が欧米で普及した。韓国、中国においても電子速記による技術革新が目覚ましく進んだ。日本では録音テープ起こしがワープロの登場とともに普及し、自動音声認識の普及が最高裁判所、国会、地方議会において進行した技術革新の時代。

## 【第五期】 (21世紀－)

前期末から加速化するコンピューターによる言語処理がスピーチ・トゥ・テキスト時代を現出して、速記のパラダイムが拡大する時代。人工知能の発達、普及によりビッグデータ処理、深層学習などの成果を採り入れて自動音声認識技術 Automatic Speech Recognitionの進歩が目覚ましく進み、音声を変換する技術の多様化が進んだ。速記の要求事項は、正確さを備える歴史的な「逐語発言記録」から、リアルタイム性を備えた「同時通訳」、精度を要求する「翻訳」が加わることとなった。

## 2) イギリスにおける草書派理論の発生

草書派 Cursive school は、手書き文字を用いる文字 Script 派の速記の概念に含まれる。この点において、文字派はティロの速記のような古代文字を起源とする手法と同じ範疇にある。ティロの速記に用いられた速記文字はギリシャ、ローマといった地中海文明で文字が創造された時代の古代文字の一類型をなしている。(図 14) 速記ルネサンスが始まったイギリスにおける最初のブライト式速記法(Timothe Bright ,1588)は「記号論」“Characterie”と命名されたが、その基礎アルファベットはブロック体のような外観の符号を用いた。筆記単位は語であった。(図 15)



X 1847 302.  
SHORT-HAND ALPHABETS  
FOR  
ENGLISH, LATIN AND GREEK;

Consisting of the Most Regular, Concise and Uniform Characters for the Letters of the Alphabet, that can be devised, or written with Pen and Ink:

With Characters for Numbers, as also Points or Stops, and other Marks, used in Writing, suitable to them; and likewise Specimens and Directions for writing by them.

PUBLISHED,

For the Use and Benefit of all Pen-Men, and especially of Writing-Masters and their Young Pupils of both Sexes,

By S. G. BORDLEY.

Printed for the Author; and Sold by I. P. Coghlan, Bookseiler in Duke-street London, and T. Billinge, Printer in Liverpool, either by Wholesale or Retail, with good Allowance to such as sell them again. Price per Single Pamphlet, 6d. 1797.

図 18 英語最初の草書派の速記書表紙  
(Shorthand, Simon Geroge Bordley)

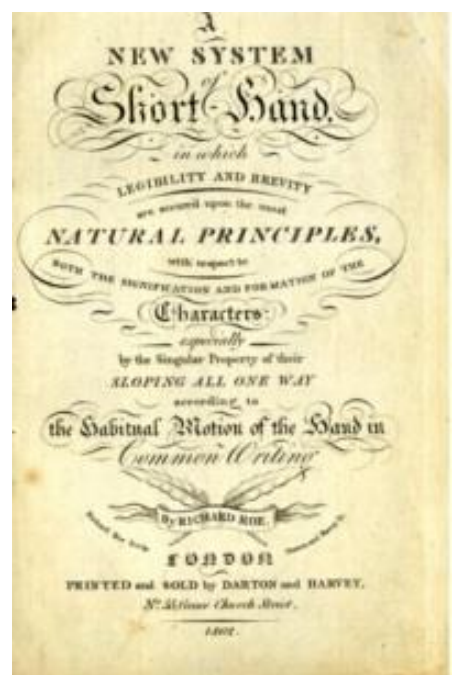


図 19 ローの速記書の表紙  
(Roe's Radiography of Improved)

PLATE I.

Consonants		Vowels	
b	β	u	u
c	γ	e	e
d	δ	i	i
f	φ	o	o
g	γ	a	a
h	h	æ	æ
k	κ	ai	ai
l	λ	oi	oi
m	μ	au	au
n	ν	eu	eu
p	π	ou	ou
q	ϕ	ou	ou
r	ρ	ou	ou
s	σ	ou	ou
t	τ	ou	ou
v	υ	ou	ou
w	ω	ou	ou
x	ξ	ou	ou
y	υ	ou	ou
z	ζ	ou	ou

Diphthongs

ay	ay	ay	ay
ey	ey	ey	ey
oy	oy	oy	oy
ou	ou	ou	ou
ou	ou	ou	ou
ou	ou	ou	ou

Triphthongs

ay	ay	ay	ay
ey	ey	ey	ey
oy	oy	oy	oy
ou	ou	ou	ou
ou	ou	ou	ou
ou	ou	ou	ou

\* See Note II.    \* See Note III.    \* See Note IV.

図 20 ローのアルファベット  
(“Roe's Radiography of Improved”, p. 42.)

18 世紀末、先行した幾何派が表音主義に基づく符号速記方式として完成して高速度領域での地位を確立しており、初期の草書派ではこれに比肩するほどの性能が得られなかったため、19 世紀に草書派がイギリスで成長することはなかった。

ドイツではフランスと同様にイギリスから幾何派の速記理論を受け入れたが、草書派のガベルスベルガー式速記法が独自に発芽することによってイギリス幾何派の翻案方式を駆逐し、その後ドイツ草書派がユーラシア大陸全体に大きな影響を与えることとなる。

#### 4. ドイツ草書派の他言語への影響

##### 1) 概要

17、18 世紀には速記理論の近代化が進んだ。その成果は知識層の利用と議会政治の広がり、さらに裁判における議事録作成の分野において新たな職業需要をつくり出した。近代科学の先進地域においてこのような速記の利用が芽生えると、それは近隣諸国へ波及していった。イギリスに始まった近代速記文明は英語を公用語とするアメリカに伝播したが、先進国のフランス、さらにはドイツへも拡散していった。ここに、英語からフランス語、ドイツ語へ近代速記理論の「第一次拡散現象」が見られる。

フランスでは半草書派の中核理論となる連綴母音が生まれ、ドイツ語においては草書派理論が成長していった。半草書派、草書派理論はイギリスへ反射して投影しつつ、一方でドイツ語草書派速記はドイツ語を公用語とする国々へ「第二次拡散現象」を伴った。この時代にはごく自然に低地ドイツ語への拡散が見られた。

知識層のリテラシー、議会政治の広がり、速記技術の需要を高め、「第三次拡散現象」として近縁語群への翻案がヨーロッパ全体に広がることは自然な流れであった。

その拡散の仕方は、例えばドイツ語の理論体系を自国語に当てはめる翻案であったが、次第に自国語の音韻的、文法的、慣用的な言語特性に適応した速記理論体系が開発されていったであろう。さらに自国語の言語特性の発見によって速記法理論を再構成して新しい理論体系へ進化する流れが認められる。

そのような流れにおいてドイツ草書派速記理論は、英語のピットマン式速記法、グレッグ式速記法と同様に異文化へ拡散していったものである。

##### 2) ドイツ草書派のヨーロッパ、ソビエトへの広がり

チェコの歴史を見ると、1851 年西スラブ語群のチェコ語では、ヘーゲル Ignaz Jakob Heger (1808-1854) がガベルスベルガー式速記法を翻案して草書派速記法を開発した。その後、自律的再構成の段階に至って、ヘーロート A. Herout (1860-1943) とミクリク S. Mikulik (1869-1952) が共同で方式統一を図り、1921 年にガベルスベルガー式速記法系統のヘーロート・ミクリク式速記法が公式方式として成立した。(図 21)

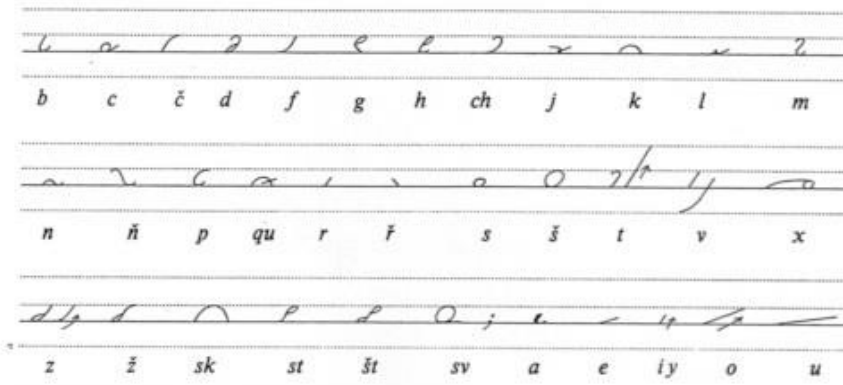


図 21 ヘロート・ミクリク式速記法のアルファベット (Art und Bau, p. 106.)

北ゲルマン語群東スカンジナビア諸語では 1662 年幾何派のスワーン式速記法が登場し、その後も幾何派が続いたが、1855 年、A. フーバー Andreas Huber がガベルスベルガー式速記法をスウェーデン語に翻案した。(図 22) 翌 1856 年にはデンマークのデッサウがガベルスベルガー式速記法をデンマーク語に翻案した。続いて 1892 年、スウェーデンのメリン O. Werling Melin(1861-1940) は草書派のメリン式速記法を開発した。(図 23)



図 22 デッサウ式速記法のアルファベット (Lebendige Kurzschriftgeschichte, p. 105,)

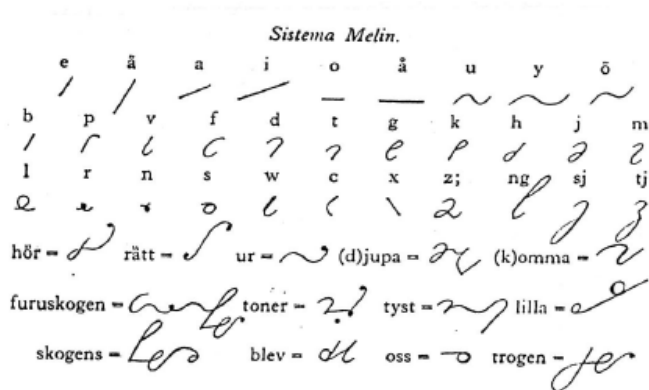


図 23 メリン式速記法のアルファベット (Encyclopedia Italiana, p703.)



ドイツ語から受け入れた速記文明が玉突きとなって隣国へ伝播していった。1852年、ノルウェーのパルダン M. Paludan はスウェーデンのゲトレク Goetrek のゲトレク式速記法を学んでデンマーク議会の速記者になったのち、ノルウェーに帰国してノルウェー議会速記者になった。これは、スウェーデン語の速記法から第三外国語への適用までの段階で3

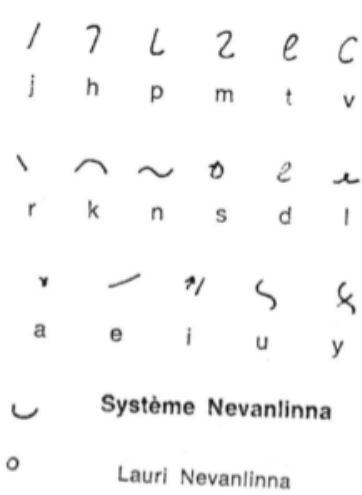


図 24 ネヴァンリンナ式速記法のアルファベット(萬国速記史, p. 344.)

言語領域に草書派速記理論を適用していった例である。パルダンの弟子、カペレン Cappelen はデンマークのデッサウからガベルスベルガー式速記法を学んで帰国後、1869年にノルウェー議会速記者となった。

フィン・ウゴル語群のフィンランドでは1872年、ネヴァンリンナ Lauri Nevanlinna がガベルスベルガー式速記法をフィンランド語へ翻案した。(図 24)

北ゲルマン語群のデンマークでは1801年ごろラスムッセン P. E. Rasmussen が初のデンマーク語速記法を考案した。1853年、デッサウ David Dessau は、ガベルスベルガーから直接速記を学んだあとデンマーク語に翻案し、この年にペテルセン Petersen がシュトルツェ式速記法から、オルムス Wormus がシュライ式をもとにした草書派速記法

の開発にそれぞれ成功した。(図 25)

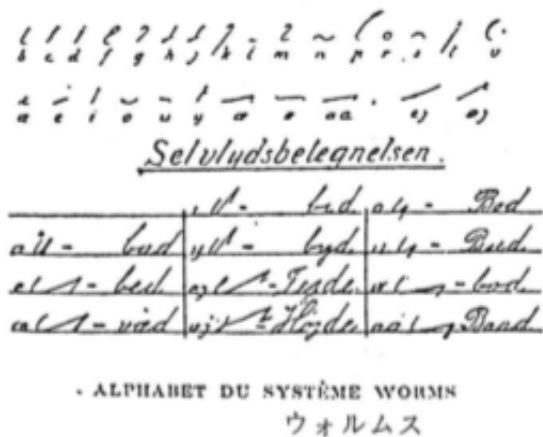


図 25 ウォルムス式速記法のアルファベット(萬国速記史, p. 341.)

スラブ派言語においても同様であった。1860年、ユーゴスラビアのカプレッツ Ivan Kaprez はガベルスベルガー式速記法を取り入れてカプレッツ式速記法を翻案した。(図 26) また、1864年にはマグディック Franjo Magdic がガベルスベルガー式速記法をクロアチア語に応用した速記法を翻案した。スケブリン Ljubomir Skeblin もスケブリン式速記法を開発した。1873年にミロバノビック J. S. Milovanovic はやはりガベルスベルガー式速記法を応用してミロバノビック式速記法を創案した。

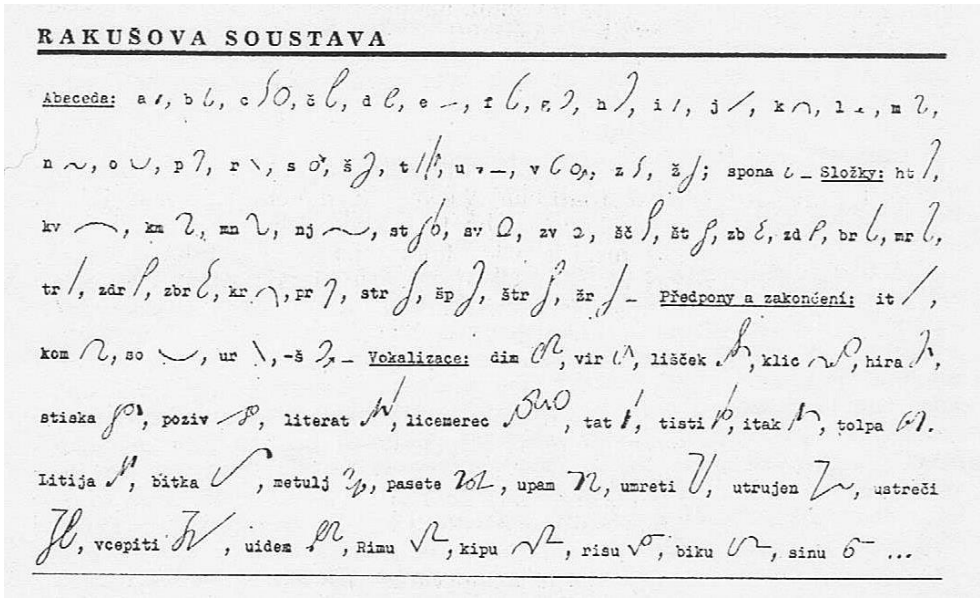


図 26 カプレッツ式速記法のアルファベット (Denjiny Tesnopisu, p. 53.)

西スラブ語群のポーランドでは1861年、ポリンスキー Joseph Polinski がガベルスベルガー式速記法を翻案してポーランド語の速記法を開発した。1955年にはR. ラザレス、J. カチュマレクが共同で作業に従事してポーランド統一速記法 JESS が開発された。(図 27)

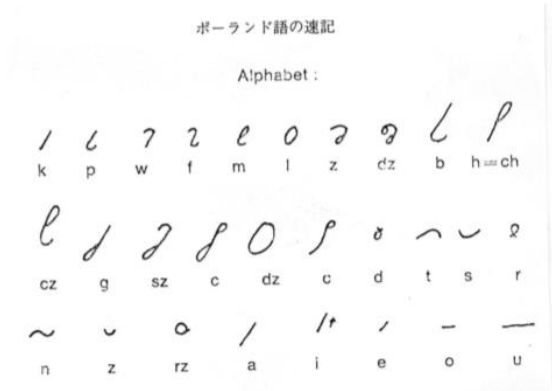


図 27 ポーランド語速記法のアルファベット (萬国速記史, p. 363.)

南スラブ語のブルガリアでは1879年、ベゼンチェク Anoton Besenchek (1854-1915) がガベルスベルガー式速記法から翻案した。ブルガリアでスラブ語へ初めての適用であった。(図 28)

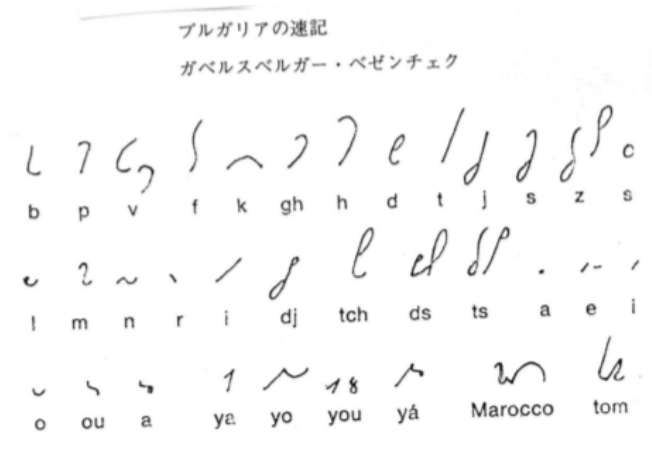
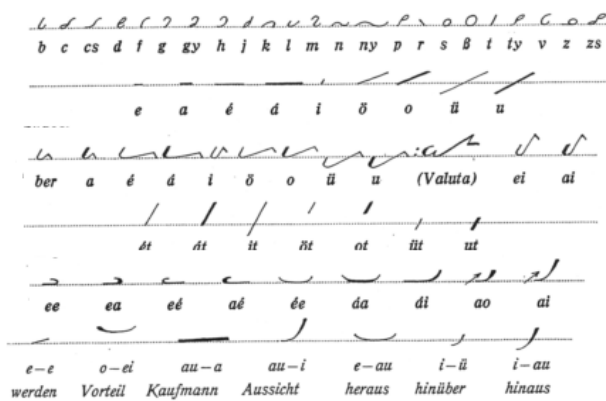


図 28 ベゼンチェク式速記法のアルファベット(万国速記史, p. 365.)

テュルク語南西語群のトルコ語では半草書派からの翻案があつたが、1877年、グリユインバウム Max Gruinbaum がガベルスベルガー式速記法から翻案した。

ウラル語族のハンガリーでは1820年、ガティ S.Gati が幾何派から翻案したが、1896年、マルコビッツ Ivan Markovits がガベルスベルガー式速記法から翻案した。これに、ファブロ Enrico Fabro が改良を加え、さらに1927年、ラドナイ Bela Radnai が改良した。(図 29、30)

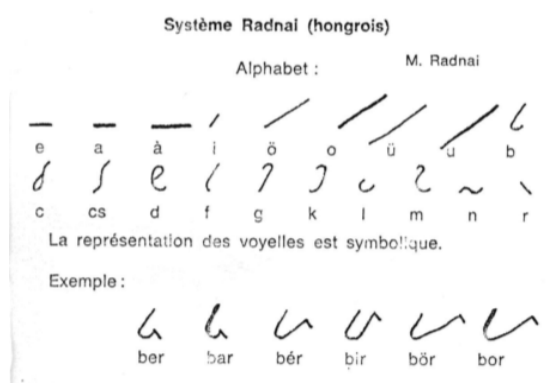


Gabelsberger-Markovits Hungary

図 29 マルコビッツ式速記法のアルファベット  
(Lebendige Kurzschriftgeschichte, p. 105.)

イタリア語派のイタリア語には英語の幾何派が伝わっていた。1859年、初の草書派としてノエ Enrico Carlo Noe(1835-1914) がガベルスベルガー式速記法を応用した実用的なガベルスベルガー-ノエ式速記法を完成した。(図 31)

図 30 ラドナイ式速記法のアルファベット  
(万国速記史, p. 361.)



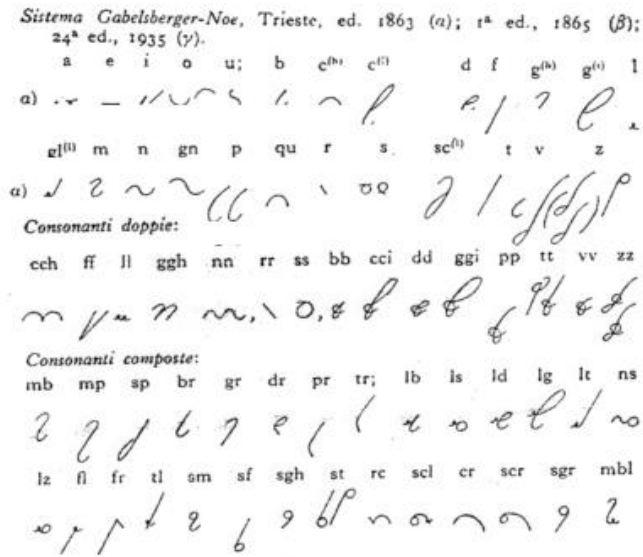


図31 ガベルスベルガー-ノエ式速記法のアルファベット  
(Encyclopedia Italiana, p. 705)

メスチーニ Erminio Meschini (1880-1914) は、1905年ノエの方式にピットマン式を取り入れて幾何派と草書派を調和させたメスチーニ式速記法を開発、これが中速度型の方式として国家から初めて公認された。(図 32)

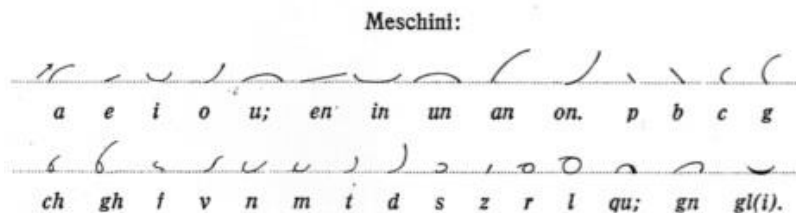


図 32 メスチーニ式速記法のアルファベット (Lebendige Kurzschriftgeschichte, p. 104.)

1910年、チーマ Giovanni Vincenzo Cima もガベルスベルガー式速記法の草書派とピットマン式速記法の幾何派とを調和させたチーマ式速記法を開発した。この方式も国家から公認され、公立学校で広く教授され、モシィアーク Abramo Mosciaro によって改良されている。(図 33)

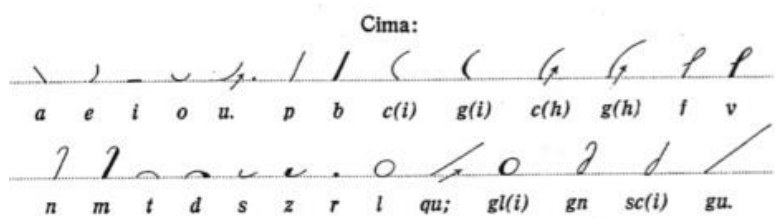


図 33 チーマ式速記法の基礎アルファベット (Lebendige Kurzschriftgeschichte, p. 103.)

ドイツの速記理論を自国の言語に適応させる方法はそのほかの言語でも知識層が挑戦していた。

イタリア語派のルーマニアには 1848 年、幾何派が伝わったが、1864 年にステネスク D. Stoenescu がガベルスベルガー式速記法から翻案した。

1856 年、ギリシャ語派ではミンドラー Joseph-Maximilien Mindler(1808-1868) がやはりガベルスベルガー式速記法をギリシャ語に適用してガベルスベルガー—ミンドラー式速記法を開発した。

ドイツ語圏では草書派が受け入れられる大きな素地があり、すばやく浸透していった。ドイツ語が公用語のオーストリアではホルスティッヒ式速記法などドイツから多くの草書派理論を採り入れていたが、1883 年、独自にファウルマン Karl Faulmann がシュトルツェ式速記法の長所を採り入れてガベルスベルガー式速記法よりも学習性を改善したファウルマン式速記法を開発した。(図 34) オーストリアでも今日、ドイツ統一方式が普及している。



図 34 ファウルマン式速記法のアルファベット (Art und Bau, p. 92.)

スイスのドイツ語圏には 1859 年、シュトルツェ式速記法が紹介され、アレンズ、ガベルスベルガー、ホルスティッヒ草書派速記法が次々と取り込まれていった。

西ゲルマン語群のオランダにもイギリスの幾何派シェルトン式速記法が伝来したが、1889年、グローテ Groote(1859-1944)が草書派のグローテ式速記法を開発した。(図 35)

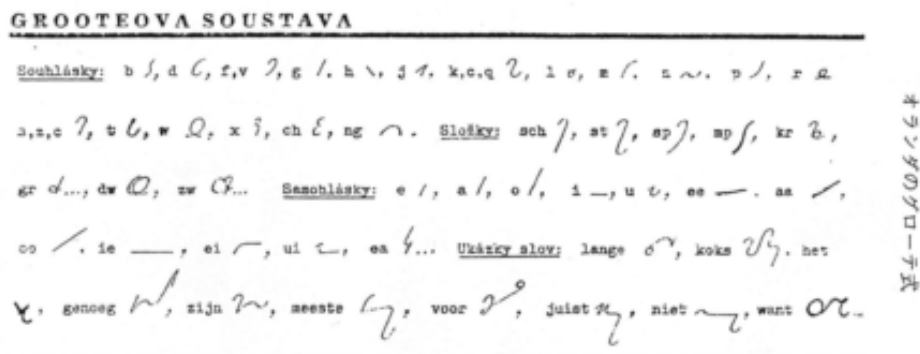


図 35 グローテ式速記法のアルファベット (Denjiny Tesnopisu, p. 70.)

また、1904年、ポイント M. Pont(1873-1949)はシャイトハウアー式速記法から翻案した。ほかにシャイトハウアーバルト式速記法、デフリース式速記法が開発された。

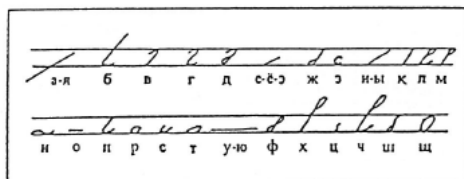
公用語の中でオランダ語人口が最も多いベルギーでは草書派のオランダ語の速記とフランス語の速記が利用されてきた。

1897年、シュライ Ferdinand Schrey はシュトルツェ式速記法をベースにした、のちのドイツ統一方式の一部につながるシュトルツェ・シュライ式速記法を開発した。1887年にザメンホフ Ludoviko Lazaro Zamenhof (1859-1917)がエスペラント運動を始めると、クノウスキー兄弟の Albrecht v. Knowski (1864-1933)と Felix v. Knowski (1868-1942)は1898年、のちに国際速記法 Intersteno となる国民速記法を開発した。これはシュトルツェ・シュライ派の草書派理論で、母音符号は上向方向、子音は下向方向の線を充てたのが特徴であった。

東スラブ語群のロシアでは最初、フランス語の幾何派速記法を取り入れた。草書派は1874年、テルネ M. Terne がガベルスベルガー式速記法からの翻案を試みた。1913年にはサポニコ A. Saponiko が取り組んだ。1920年に至り、サカロフ Sokolov がサカロフ式速記法を開発した。1925年に方式統一が決定され、サカロフ式速記法をもとに1933年、ロシア統一速記法 GESS(Gosudarts vennaia edinaja sistema stenografii)が成立した。(図 36、37)

Ф. К. Габельсбергер, 1834, Германия	
Геру—Микулик, 1921, Чехословакия	
Б. Раднай, 1926, Венгрия	
М. Терне, 1874, Россия	
А. и З. Сапонько, 1913, Россия	
П. Бурлаков (НУС), 1933, СССР	
ГЕСС, 1933, вар. 1946, СССР	

图 36 ロシア語草書派速記法の発達 (百科事典, Stenographia.)

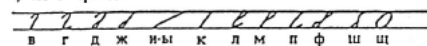


Группировка знаков алфавита

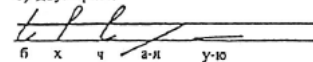
Знаки алфавита по своим размерам делятся на:

1. Большие:

а) одномерные

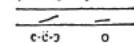


б) двумерные

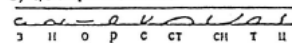


2. Малые

а) полумерные



б) 1/3 меры и меньше



По форме знаки делятся на:

а) остроокаймивающиеся



б) овальные



图 37 ロシア統一速記法 (GESS) のアルファベット (Stenographia, p. 8.)

## 5. ユーラシア東部への草書派の広がり

### 1) 日本語への草書派理論の適用

日本は単一言語の国であるものの、世界でも珍しく多型の文字を用いている。日本人は、中国から取り入れた漢字、漢字をもとに派生した平仮名、片仮名、欧米から取り入れたラテン文字、アラビア数字を混在させて日本語を表記する。漢字の中では楷書、行書、草書が日常使用され、それらの混用も認められるほどで、それらの筆記体から生成された速記理論も生まれてきた。高速度逐語速記法では幾何派が圧倒的に勢力を持ち続けてきたが、幾何派符号においても、多様な日本文字の筆記体の運筆から影響を受けている。

日本において草書派の存在は、最初の幾何派速記法が実用化されるころにすでに知られていた。当時、新方式の開発エネルギーは幾何派に重点的に投入されており、ドイツ流草書派の日本語への適用を企てる速記研究者は結果的に毛利高範以外には出なかった

のちに子爵となる毛利は江戸時代の佐伯藩の最後の領主であった。明治維新後、ドイツへ留学した間、彼は速記が広く普及している状況を見て草書派速記法の開発を決意した。しかし、その完成に29年を要し、ようやく1919年6月26日に毛利式速記術を完成した。

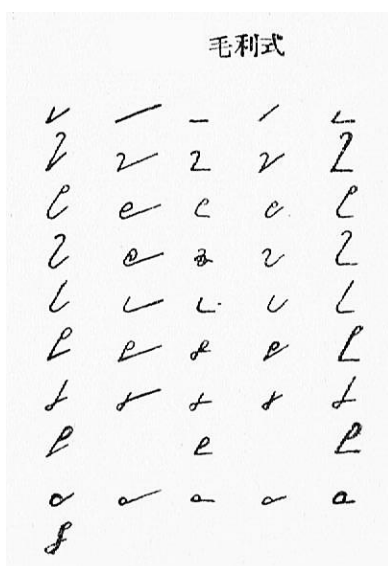


図 38 毛利式速記法の基礎符号

(日本速記方式発達史, p. 66.)

毛利は幾何派速記法の学習経験があり、それらにならって、ファウルマン式速記法をもとに草書派の理論体系を整える研究を続けた。最初に表音文字の設計に着手し、草書派の基礎符号を構成する清音、濁音、拗音に対して草書派の音節符号を設定した。もちろん、音節符号の生成においてはその前提となる音素の子音、母音を設けていた。<sup>\*5</sup> (図 38)

ただ、草書派の字形は幾何派に比較すると数倍の線量を有するので、速度を高めるために、長い年月にわたり毛利は研究を重ねた。その中で、子音+母音の複合形における書線負荷の軽減が最も大きな課題であった。毛利は母音筆記の負荷を軽減するために略韻法、語彙の音構造に対する線負荷軽減法として略音法を考案し、幾何派の性能に近づける効果を実現した。

母音を書く負担を軽減する略韻法においては、3つの筆記帯域の配置と、線分符号の長線化、それに濃線化によって特定の音節を表象して線量を半減させる効果を可能とした。彼は速記教本を発行するとともに、1923年には毛利式速記学校を開校して速記者の養成に当たった。また、彼は2人の娘にみずからの毛利式速記法を教えた。次女泰子は近衛秀麿夫人となったのち、西園寺公望の秘書を務めた原田熊雄の口述を毛利式速記法で筆記した。彼女は、太平洋戦争の責任を問う東京裁判で唯一の証拠採用となった「原田日記」の筆耕



に貢献した。

東京空爆で毛利速記学校は焼失、その後弟子の穂積武子が速記学校を再興して速記者を養成した。現在、速記教育は終了しており、毛利式速記法は 9 名の職業速記者を育てるにとどまった。

このほか、1931 年に、デーゲン J.A.Degen がスペイン語版シュトルツェ式速記教本をもとに、デーゲン案を創案した。(図 39) また、1931 年、大場格がクノウスキー式速記法をもとに国際速記 Intersteno 日本語版を公表した。この速記法はエスペラント関係で普及している。(図 40)

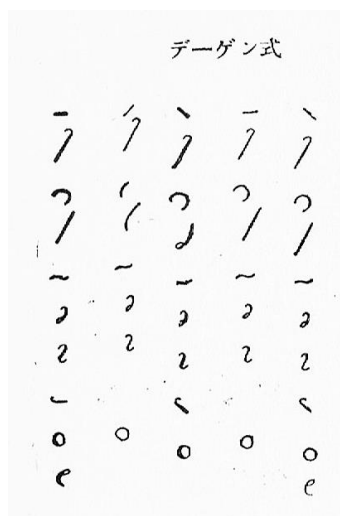


図 39 シュトルツェ式から翻案したデーゲン案 (日本速記方式発達史, p. 118.)



図 40 クノウスキー式国民速記を翻案した日本語速記法の大場案 (日本速記方式発達史, p. 118.)

一方、中国の顔廷超 Yan Tin Chao (1916.9.1-2008.12.6) は、1985 年 4 月 15 日、斜体派日本語速記法を創案した。顔によれば、日本語は粘着 (膠着) 語系統に属し、(1)動詞、形容詞に語尾変化があり、比較的複雑で、慣用形に留意しなければならない、(2)慣用形は決まった言葉の組み合わせでつくられ、音数が多く、速記する際に微妙な違いを分別するようしなければならないとする。(図 41)

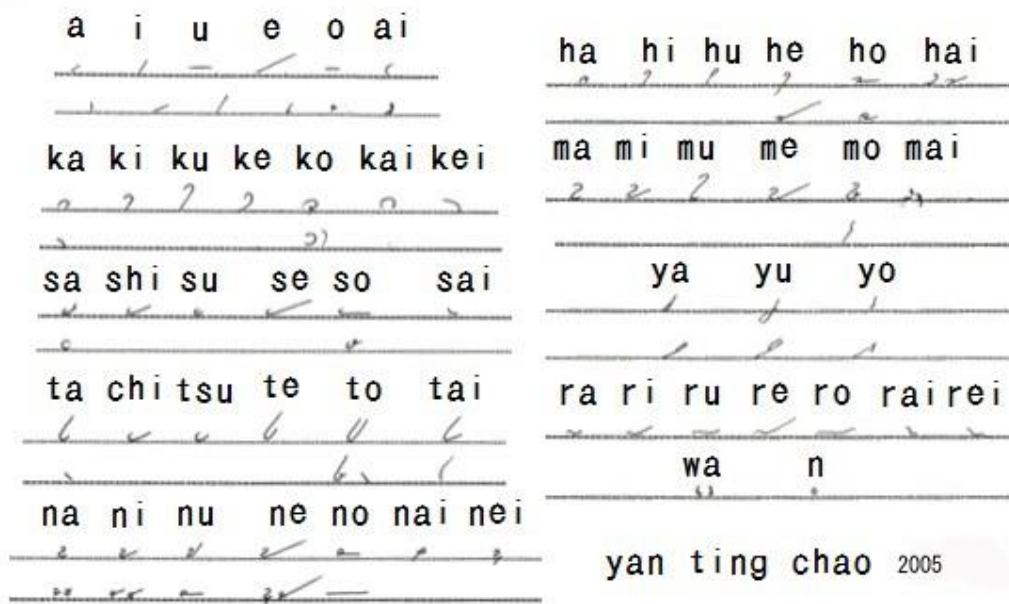


図 41 顔廷超斜体式日本語速記方案 2005 年(速記人生回憶錄, p. 43.)

2002 年から 2009 年の開発期間を経て、平野明人は日英両言語対応の草書派メモ速記法



図 42 平野式速記法の基礎符号(平野明人による)

“ EPSEMS” (Eccentric Phonetic Signs Easy Memo System) を完成した。(図 42)幾何派の基礎図形は連続上、鈍角接合の場合は正確に筆記しにくいことや、筆が乱れると読めないという課題があった。平野は子音と母音符号を組み合わせて、くずれにも強い速記符号を目指した。曲線、直線が多少崩れても判読できる動態符号を工夫し、微妙な点を意識しないで筆記、読み返せる符号を実現した。また、日本語では仮名文字の影響を受けて、清濁音の差異化に安易な方法をとるが、平野は清音符号、濁音符号を分けて、厳密に音声を表記できるように配慮した。また、筆記線量が多くなる草書派の課題を解決するため、上段、下段を利用して符号を省略、省画化した。子音連続、

ラ行音処理、子音省画、字音語処理など、幾何派の知見を採り入れて、日本語草書派速記の立案、設計に努めたとする。

以上は、符号式速記の分野であるが、日本語では日本文字を基礎にした速記法研究が古くから行われてきた。符号式は多くのきまりがあって学習性がよくなく、また正確に筆記できるようにする点で難しさがある。その分、カナやかなを用いると導入は容易になるが、筆記速度は低速度となる。

片仮名、あるいはその断片から基礎符号を導く「カナ速記」では、1910年に日下部忠次が「写言術」を公表したのが始まりである。写言術では片仮名を縦書きすることが特徴であった。(図43)その後、縦書き速記は1965年、三村侑弘が「速記術ABC」で公表したものと2件である。

(図45)

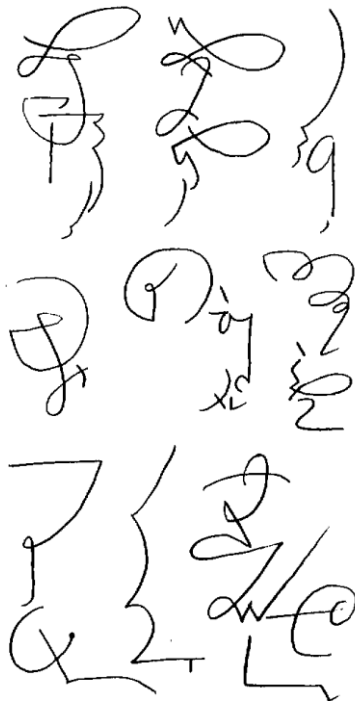
日下部案

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
パ	ピ	プ	ペ	ポ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	リ	ル	レ	ロ
ウ				
ウ				

図43 カナ速記の日下部案(日本速記方式発達史, p. 66.)

図45 三村式縦書き速記法基礎符号(速記, 表紙裏)

- いろはにほへとちりぬるをわか  
よたれそつねならむ  
ういのおくやまけふこえて  
あさきゆめみしえひもせずん。
- なかきよの とおのねふりの  
みなめさめ なみのり  
ふねのおとのよきかな



岩村式

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
パ	ピ	プ	ペ	ポ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	リ	ル	レ	ロ
ウ				

図44 岩村式カナ速記の基礎符号  
(日本速記方式発達史, p. 118.)

1922年桜井郷三「片仮名早書記法、1929年菅原長太郎「学生筆記法」と続いたあと、1930年に岩村学の「岩村式カナ速記法」が公表され、高速度の中根式速記法の理論を活かした同式は仮名速記の評価を高めた。(図44) 1939年岩本成雄の片仮名式速記法が続いた。

平仮名では初めて1941年、乙部泉三郎の「ひらがな速記術」が登場した。平仮名を分解してつくった速記符号を提案したのは1942年、相賀庚の「相賀式速記法」であった。1950年には岩村系統の深堀義輝が「深堀式カナ速記法」を公表したが、のちに1980年中田知が「深堀カナ宇宙式」と命名して公表した。仮名速記は符号式の速記家が普及版として創案する傾向が見られ、1955年西来路秀男の「標準式カナ速記法」などが公表された。一方、中根式速記法の中根正雄は1958年、片仮名と平仮名を巧みに組み合わせて筆記する「中根カナ式速記法」を公表した。

(図46)

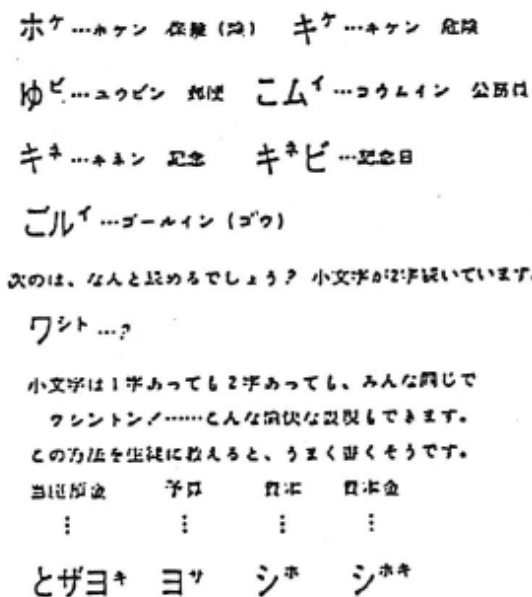


図46 中根カナ式速記法の例  
(スピードメモ法から作成)

## 2) 中国における草書派速記法の発生と発展

### (1) 中国速記史の時代区分

中国における速記の歴史は、第1期を1896年から1911年、第2期を1912年から1937年、第3期を1938年から1949年9月、第4期を1949年10月～1955年、第5期を1956年から1978年、第6期を1979年から1996年としている。<sup>\*6</sup>

第1期は中国速記の啓蒙時期で、1896年蔡錫勇の「傳音快字」創案から蔡璋の「中国速記学」へと、新文字発明から速記体系への過程であり、清朝が設けた議会である資政院に採用されるまでの期間である。この期間は幾何派だけであり、叶子式の着想も生まれた。

第2期は、初創期とし、中華民国が成立して議会が始まった時期で、使用された幾何派の方式は蔡式速記法と張才式速記法であった。この時期に叶子式、半草書派があらわれた。

第3期は、拡張期とし、日中戦争が始まり中華人民共和国が成立する前の期間であった。

第4期は、発展期とし、中華人民共和国建国に至るまでの期間であった。この期間に、速記の応用が高まる機運にあり、1952年に草書派のロシア統一式速記法がもたらされ、1958年に北京速記学校が開校され、清国時代の速記学堂を継承して速記技能教育が国家によって行われた。

第5期は、低調期とし、文化大革命が10年間続いて速記教育は低調だった。

第6期は、革新期とし、速記活動が復興する百花斉放の期間であった。

その後、現代までに電子速記が唐亜偉によって発明され、中国語 CART（電算支援リアルタイム反訳）など、速記における技術革新が目覚ましく進んできた。

## (2) 中国語における草書派速記理論発展の概略

中国における速記の誕生は1896年、蔡錫勇の「傳音快字」であったが、掃除文盲を目的とした文字改革運動であった。その後、議会在置かれることになり、錫勇の次男、蔡璋が政府の要請を受けて「中国速記学」として開発した経緯がある。初期の速記理論は幾何派に属しており、中国の草書派諸速記方式は1951年にロシア統一方式（GESS）の伝来を受けて始まった。

1952年、速記月報5月号において唐亜偉が「工農化速記方案」、顔廷超が「人民新速記方案」を発表し、出版元の速記月報社が唐式と顔式の共同研究組織を設けた。1953年9月に、このグループ案の「斜体式中国速記案」（総合速記方案）を公表し、中国語草書派速記法の基礎を確立した。1958年10月、北京速記学校は中国で初めての草書派速記法の教材「斜体式漢語試用速記教材」を出版した。中国語の草書派速記理論は、顔廷超がその後も研究を続けて多くの業績を残した。

早期草書派3方式の基礎符号 Alphabet of early 3 systems

	B	P	M	F	D	T	N	L
Tang	ㄅ	ㄆ	ㄇ	ㄏ	ㄏ	ㄏ	ㄏ	ㄏ
Yan	ㄅ	ㄆ	ㄇ	ㄏ	ㄏ	ㄏ	ㄏ	ㄏ
Laozu	ㄅ	ㄆ	ㄇ	ㄏ	ㄏ	ㄏ	ㄏ	ㄏ
	G	K	H	J	Q	X	zh	ch
Tang	ㄍ	ㄎ	ㄏ	ㄐ	ㄑ	ㄒ	ㄗ	ㄘ
Yan	ㄍ	ㄎ	ㄏ	ㄐ	ㄑ	ㄒ	ㄗ	ㄘ
Laozu	ㄍ	ㄎ	ㄏ	ㄐ	ㄑ	ㄒ	ㄗ	ㄘ
	sh	R	Z	C	S	Y	W	yu wo
Tang	ㄕ	ㄖ	ㄗ	ㄘ	ㄙ	ㄚ	ㄛ	ㄜ
Yan	ㄕ	ㄖ	ㄗ	ㄘ	ㄙ	ㄚ	ㄛ	ㄜ
Laozu	ㄕ	ㄖ	ㄗ	ㄘ	ㄙ	ㄚ	ㄛ	ㄜ
	ai	ei	ao	ou	an	en	ang	eng
Tang	ㄞ	ㄟ	ㄠ	ㄡ	ㄢ	ㄣ	ㄤ	ㄥ
Yan	ㄞ	ㄟ	ㄠ	ㄡ	ㄢ	ㄣ	ㄤ	ㄥ
Laozu	ㄞ	ㄟ	ㄠ	ㄡ	ㄢ	ㄣ	ㄤ	ㄥ
	a	e	o	l	u	ü		
Tang	ㄚ	ㄜ	ㄛ	ㄌ	ㄨ	ㄩ		
Yan	ㄚ	ㄜ	ㄛ	ㄌ	ㄨ	ㄩ		
Laozu	ㄚ	ㄜ	ㄛ	ㄌ	ㄨ	ㄩ		

Tang 唐亜偉  
Yan 顔廷超  
Laozu 集団

図 47 中国語の草書派早期3方式の基礎符号比較表（速記符号学概論, p. 55.）

中国語の速記理論の発展過程について、蘇文は、別の視点から3期に分ける。第1期は1896年から1935年までを前期として、速記の対象が古い漢語の影響を受けていた書き言葉の期間である。その後、1936年から1949年までの第2期は話し言葉を対象とするようになった期間である。

第3期の1950年以降は毛沢東の百家争鳴百花斉放の方針により速記研究が盛んになった期間である。第3期には、民族化、科学化、大衆化の三化の基本方針に基づいて、速記理論をいかに中国語と適切に結合するかという課題と、速記は人民のためのものであるという原則

のもとに、さらに速記の流派を新たに開発するよりも集団主義で各流派の長所をとり、その短所を補うために共同で取り組む視点から「大衆化」と「高速化」を目指して研究が行われた期間である。その際、速記法は“三易”つまり「易学」、「易認」、「易写」を共通課題として



一方、1982年、陳榮濱は音素化原則に基づき草書派の基礎符号設計に新たな方向性を示した。音素化は、短母音の/a/、/e/、/i/、/o/、/u/、/ü/の6母音の組み合わせで二重母音（複韻母）、鼻韻母、複母音をあらわす発想であった。

顔、唐、閻徳勤は普及しやすい速記を目標に掲げて共同研究し、1983年に「3Y式斜体速記方案」を創案した。彼らはラテン文字の筆記体の図形要素を分割して速記符号を設計した。これはガベルスベルガーが試みた基礎アルファベット創出の原点であった。3Y式では唇音、舌尖音、舌根音、舌面音、捲舌音、舌歯音と音声学的な調音点に基づいて科学的な図形配分を行った。また、D、Y、SH、J、ZH、L、B、X、G、H、M、T、W、Z、N、CH、Q、F、R、K、S、C、Pの順位で頻度が高い子音に小さい図形を割り当てて速く書けるようにした。彼らは草書派の記号要素を優先して導入したが、そのために幾何派、半草書派から不足する符号を導入したことが特徴的である。（図49）

一方、張邦永は1963年、「求易速記法」において、主に草書派の基礎符号に半草書派の符号を取り入れた折衷方式を公表した。張は4回の改良を行い、草書派、半草書派、幾何派の混合した方式となった。

中国語における草書派方式には、王金梁の「普通話斜体式速記」（1955年）、余慕陶の「斜体式速記講義」（1955年）、唐嗣豊の「漢語斜体速記」（1958年）などもある。

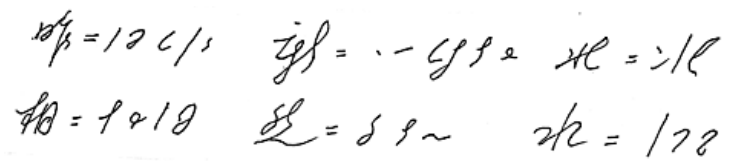


図49 顔廷超は中国語草書派の由来を漢字の草書体に求めた（速記人生回憶録, p. 16.）

ほかに、文字をベースにしたスクリプト派では、劉志忠の漢字を簡単にして用いる「簡筆速記法」、顔廷超の注音字母草書式の「注音筆記法」、李思源の「速記化新文字方案」、劉越の「簡字速記術」がある。

1976年から1977年にかけて顔廷超はハルビン市工人業余大学で草書派を指導したほか、その後黒竜江大学などで教育に当たり、1987年に「快速記録斜体速記」を出版した。1980年以降は閻徳勤、李卓人が「3Y式速記法」を教育した。1980年4月には、陳榮濱はみずから創案した「音素化漢語速記法」の普及に努めた。

### 3) 朝鮮語への適用（顔廷超式朝鮮語速記法）

顔廷超は、朝鮮自治区の嚴世亮と共同で朝鮮語草書派速記方案を設計し、1954年、中国の速記月報で公表した。朝鮮語の基礎子音は/g/、/n/、/d/、/l/、/m/、/b/、/sx/、/eng, ng/、

/zj/, /c/, /k/, /t/, /p/, /h/의 14 個、半母音は/i/, /u/의 2 個、母音の連書は 18 例、結合子音は 13 個、母音は/a/, /u/, /e/, /o/, /ai/, /ei/, /ü/ 7 個、文末符号/, /./, /?/, /!/의 4 種を用意した。そのほか、各種の縮記法、略記法を設計した。(图 50)

图 50 顏廷超式朝鮮語速記法の基礎符号(速記人生回憶錄, p. 19)

### 斜体式朝鮮語速記方案 (顏廷超)

**基本子音符 14 個**

G	N	D	L	M	B	S

**半母音 2 個**

i	u

**結合子音符**

i	ui

根据朝鲜语特点, 凡是子音后连接母音 i ui 或半母音 i 音节时, 将子音符延长来表示母音的合并, 这种含有母音在内的子音符叫做结合子音, 共 13 个

gi	ni	di	li	mi	bi	si

不常用

zi	ci	ki	ti	pi	hi

(四) 母音符 (基本单音) 共 7 个

a	u	e	o	ai	ei	ü

**母音連写**

**詞頭**

az	uz	ez	oz	aiz	eiz

**詞尾**

za	zu	ze	zo	zai	zei

**詞中**

1 u	2 a	3 e

zul	zug	zubi

zal	zag	zabi

zel	zeg	zebi



#### 4) インドネシア語の草書派方式

約 13, 000 の島嶼からなるインドネシアはオランダ語、フランス語、英語の速記が伝えられ、オランダの植民地時代にオランダ語のグローテ式速記法が使用されていたため、インドネシア語に翻案されていた。それらの中でグレンデンが早い時期に創案されていたが、1924 年、エレザー・カルンデングの父がオランダ語の方式からカルンデン式速記法を開発した。この方式はインドネシア共和国独立運動の中で 6 人の速記者が独立準備委員会の議事録作成に従事したと伝えられている。カルンデン式は 1968 年、政令 51/1968 により速記の国家規格として指定されている。このほか、荒木章によると、パンガベアン式の速記符号などもある。

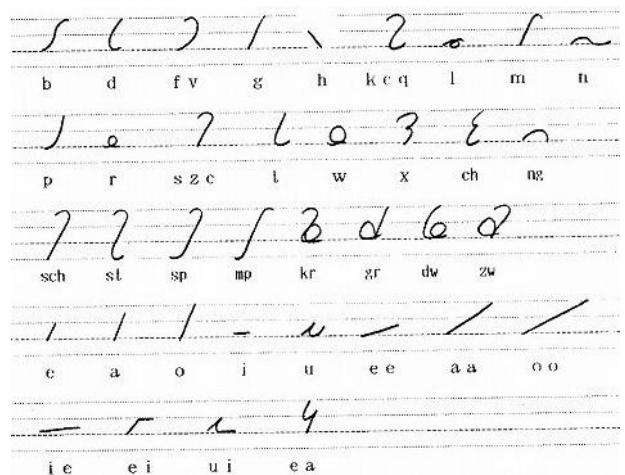
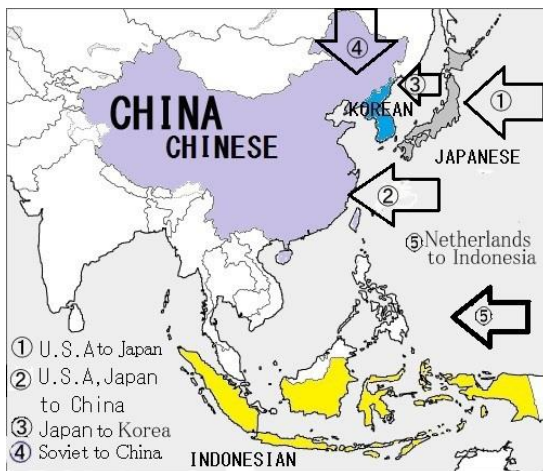


図 51 グレンデレン式速記法

#### Karundeng 1968

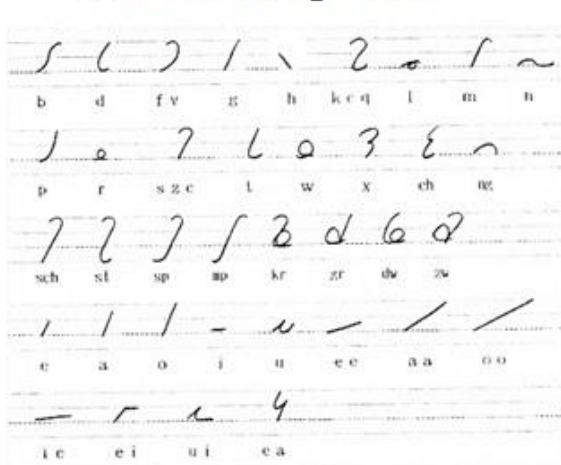


図 52 カルンデン式速記法

#### PANGGABEAN

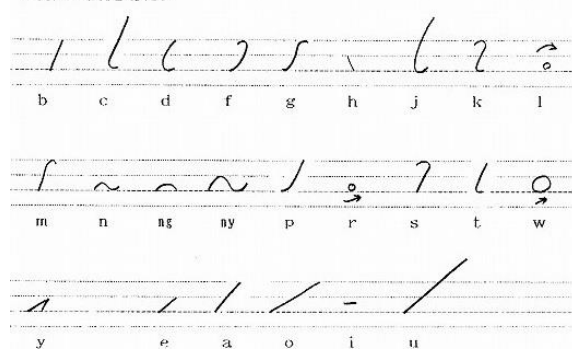


図 53 パンガベアン式速記法

ナバルによれば、このほかフランス領となった極東植民地ではデュプロワエ式速記法が使用されたが、インドネシアにあったイギリス領ではピットマン式速記法が用いられていた。

## 6. おわりに

日本語、英語、ドイツ語の速記は、それぞれの言語の特性を基盤に体系が設計されている。すなわち表音主義の近代速記法では(1)言語音を固定するための基礎符号、(2)音韻の規則性を利用する縮記法、(3)簡単な符号や言葉を表象するための略記法、(4)そして書かなくてもわかる言葉は省くという原理の省記法の理論体系と(5)個別の略語から構成される。

言葉の短縮の原理は言語を越えた普遍性を備えていると思われ、異言語の翻案者が原理を応用しながら第二の創案者となる。創案者には、だれにでもなれるかという否である。どのような線条を用いて、どのような音韻を表記するか、また連続するかという工夫は創案者の着眼、思想によって異なる。

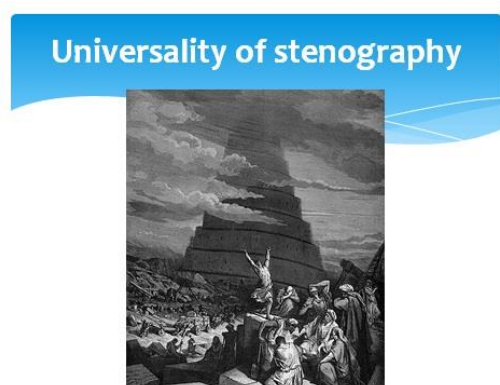


図 54 バベルの塔と速記の多様化



図 55 速記理論の普遍構造

ドイツ語草書派体系のままでは漢字文化圏の日本語、中国語を書くことができなかった。毛利は速記の原理を日本語の特徴に当てはめて工夫して高速度で速記できるようになった。毛利式速記法、顔式斜体速記法は基本的なガベルスベルガーの速記理論の原理が普遍性を持つことを証明したことになる。

漢字文化圏における草書派の成立に中国の顔廷超の貢献するところが極めて大きかった。また日本では毛利高範が生涯を捧げて着想から実用までをやり遂げた。

今回、ドイツの草書派理論が漢字文化圏に及んできた歴史を振り返り、またドイツからオランダを経てオーストロアジア語族のインドネシア語へ伝わっていることを知り、幾何派が中心の日本でよく学べなかった草書派文化をたどることができた。そのきっかけとな

ったシュンペーターの速記解読に関して、インテルステノの場においてドイツの速記学研究者、速記者、それに中国の速記研究者と協力できたことは大変幸運だった。インテルステノの友人へ日独の協力でこの事業が完了したことを宣言する。

最後に中国語の文献を読む上で前野貴子、アブストラクトの英文訳で井上美弥子、川嶋みほ子、情報の整理で桑原みなみの皆さんの助けを借りたので、謝辞を表したい。

(巻末資料)

### 「資本主義・社会主義・民主主義」研究作業にかかわるクロニクル

(2017/08/11 T 兼子次生)

**1883. 2. 8** ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター Joseph Alois Schumpeter (JAS) がオーストリア・ハンガリー帝国 (後のチェコ) モラヴィアで誕生した。

**1883. 3. 14** マルクス Karl Heinrich Marx (1818. 2. 8 誕生) がロンドンで死去した。64 歳だった。

**1883. 6. 5** ジョーン・メイナード・ケインズ John Maynard Keynes (1946. 4. 21 没) が英国で誕生した。

**1897. 7. 18** のちの東ドイツの議会速記者 ハイム Arthur Heym が誕生した。

**1908** シュンペーターが 25 歳で処女作「理論経済学の本質と主要内容」を執筆した。

**1912** シュンペーターが、主著「経済発展の理論」を出版した。

**1919** シュンペーターが「平和の経済的帰結」を出版した。

**1930** ケインズが「貨幣論」を出版した。

**1931. 2. 27** 浦城晋一 Shin-ichi Uraki が三重県で誕生した。

**1932. 6. 1** 7月の選挙でナチが第一党になった。翌 1934 年、ヒットラーが国家元首になった。

**1936** ケインズが「雇用・利子および貨幣の一般理論」を出版した。

**1936. 5. 29** マンフレッド・ケーラー Manfred Kehrler がチェコ国境のエルツ山地で誕生した。

**1941** シュンペーターが「資本主義、社会主義、民主主義」(第一版)を完成し、翌 1942 年第一版が刊行された。

**1944. 1. 7** 兼子次生 Tsuguo. Kaneko が大阪市で誕生した。

**1945. 5. 7** ドイツ軍が無条件降伏した。

**1947** シュンペーターが「資本主義、社会主義、民主主義」(第二版)を完成した。

**1949. 10. 7** ドイツ民主共和国が成立、ドイツは分裂国家となった。

**1949—1963** ハイムが、ガベルスベルガー (Gabelsberger) 式速記技能を用いて、東ドイツ議会の速記者として活躍した。後年、東ドイツの Kehrler が Heym を兼子へ紹介し、兼子がハイムの連絡先を浦城へ知らせ、ハイムがシュンペーターの速記メモを反訳(解読)する。

**1950. 1. 8** シュンペーターが動脈硬化で急死した。

ブーディ夫人 Elizabeth Boody Firuski Schumpeter が、夫の遺品として 1) 秘書のタイプ打ち

原稿、2)文書類、約1,700枚を日本へ寄贈する意向を示した。

**1951.11.6** ブーディ夫人がシュンペーターの草稿文書類は日本へ行くべきだと考へると言明した。寄贈の連絡を受けた東畑精一 Seiichi Tobata が指示し、学生の古谷弘 Hiroshi Furuya が引き取りの労を執った。

**1951** S. E. ハリス編「社会学者シュンペーター」が発行され、1955年中山伊知郎、東畑が監修、坂本二郎が翻訳して出版された。

**1954** シュンペーターの遺稿をもとに「経済分析の歴史」が出版された。

**1956** 浦城が、東京大学大学院社会科学研究所を修了した。

**1964** 「近代経済学の群像」に「シュンペーター——学派をこえた非凡な教師」が収録された。

**1970 年ごろ** 東畑が出身地の三重県へみずからの土地売却代金の多くを寄付して県が三重県農業技術センター構内に建てた資料館（のちに東畑記念館）が完成した。

**1983.5.6** 東畑が(1899.2.2-1983.5.6)死去した。東畑の遺志により、数万点の書物、資料は、東畑が初代所長を務めた農林水産省農業総合研究所ほか、幾つかの大学に寄贈された。その他の書物、文献、文書類は三重県農業技術センター内の資料館に寄贈された。三重県は資料館を東畑記念館と改称し、東畑の我が国及び三重県に対する功績を後世に残す施設とした。

**1985.2.** 浦城は東畑記念館にあった東畑の遺物を整理中(1984~1986)、シュンペーターの手書き原稿、ノート類を発見し、1年後にタイプ打ちの草稿を発見した。浦城はそれらの遺物の研究を行うことを決意した。

東畑の遺物は、蔵書、諸書、諸論文、諸報告、諸調査資料からなり、遠戚であり教え子であった浦城が約2年間、選別に従事した。浦城は、東畑記念館でシュンペーターの手書き原稿、速記ノート、タイプ打ち草稿をコピーして解読と整理を始めた。浦城は草稿と刊行本の照合作業に取り組み、1987年6月に全容を把握した。そしてこのころ浦城はシュンペーターの手書き原稿を読むため、今岡日出紀、米川紀生、木南章と読書会を持ったが、一人で読めるようになったため、勉強会は2、3か月で消滅した。

**1985 ごろ** 浦城はシュンペーターの速記の解読を依頼するため、ブリタニカ Encyclopedia Britanica の編集者に「速記」の項の執筆者の紹介を依頼した。浦城は紹介された向井征二 Seiji Mukai にシュンペーターの速記の解読者を照会したところ、向井は兼子を浦城に紹介した。

**1986 ごろ** 浦城シュンペーター兼子へシュンペーターの速記文字解読の可否を問い合わせた。ページサンプルを東ドイツのケーラーへ送り、反訳できる速記者を捜した。

**1986.11.6** 浦城からハイムへの書簡の下書きの日付がこの日とされている。内容は「解読した結果を受け取った。感謝して、お礼に紅茶とケーキを贈る」と書かれている。(兼子と浦城はこの書簡の下書きの作成は「1988年秋ごろ」とみることが妥当と断定した)

**1987.4.1** 兼子が日刊工業新聞 Nikkan Kogyo Shimbun (Industrial Daily News Ltd.) 大阪支社(編集局編集委員・記者)から福井支局(支局長)へ転勤した。

**1987.12.30** 兼子は浦城へ「解読者が見つからない」と手紙で知らせた。

**1988 春** 照会していた西ドイツ、ヨッケムス Helmut Jochems から兼子に書簡があり、解読者

の照会先として速記とタイプライティングの調査・教育研究所、責任者のハンス-ユルゲン・バーゼ博士、議会・法廷速記者協会、ガベルスベルガー速記中央協会が示された。

**1988. 3. 15** 兼子は浦城へ「その後、問い合わせの一つ、ケーラーから、ドレスデンの Heym が見つかり、反訳を協力してもらえる」旨の回答があったと手紙を書いた。

**1988. 5. 20** 浦城はハイムへの手紙に「1988. 4. 28 付け手紙を受け取った。ケーラーへのお礼の言葉」と書いた。

**1988. 6. 2** 浦城はハイムへ「複写コピーを送った」旨の手紙を書いた。

**1988. 6. 20** ヨッケムスから兼子への手紙にガベルスベルガー式速記の解説が書かれていた。

**1988. 6. 23** この日、三重大学生物資源紀要に、「J. A. Schumpeter” Capitalism, Socialism and Democracy” の Manuscript の存在の由来」と題する論文が受理された。著者は浦城、木南 Akira Kiminami。発行は同年 12 月 20 日、三重大生物資源紀要第 1 号:39-49 ページであった。

**1988. 8. 23** この日の兼子の手帳に、富士工業 (Fuji Kogyo のちに Fuji Industries Co. Ltd に商号変更) と記入があった。兼子は富士工業の仲野至道社長 President Shido Nakano へ同社のドイツ事務所駐在員に浦城への協力を依頼していた。この日、仲野に会い、かねて依頼していた東ドイツとの連絡について状況報告を聞いたと推測される。

**1988. 8. 24** 兼子は浦城へ富士工業の小林成彬 Nariaki Kobayashi を紹介する手紙を書いた。小林は仲野の命を受けてドイツ駐在へ赴任、ハイムとの連絡等を仲介した。

**1988. 9. 19** この日の兼子の手帳に、「小林成彬、03(573)4751、上に三重大学浦城先生、052(32)1211 と書かれ、富士工業の電話 078(331)2521」が書かれていた。

**1988. 11. 14** 小林は浦城へ手紙を送り、内容は「ハイム氏を訪問、写真送付。9 月 7 日～8 日、ライブツィッヒへ行く」と書かれていた。

**1988. 11. 17** 小林から浦城へはがきが送られ、あて名面に浦城の筆跡で金額等の書き込みがあった。ハイムへの謝金とみられる。

**1988. 11. 29** ケーラーから兼子へ手紙があり、内容は「小林からの連絡がない。ハイムは報酬に満足している」と書かれていた。

**1988. 12. 1** ケーラーから浦城へ手紙があり、ハイムの写真をつけて「ハイムは 91 歳」と書かれていた。

**1988. 12. 4** ハイムから浦城へ「12 月 5 日大きな小包を受け取った。贈り物。1-34 の Duplikate (コピー) を送った。クリスマスおめでとう」と手紙を書いた。

**1988. 12. 15** 浦城はハイムへの手紙で「35-72 の Duplikate を送った」と書いた。

**1988. 12. 19** ヨッケムス→兼子書簡。ドイツと日本の速記文化について意見。

**1988. 12 ごろ** ケーラーから兼子へ手紙があった。

**1989. 1. 16** ハイムから浦城へ「130-150、73-102 の解読結果を送ると手紙があった。

**1989. 1. 19** ハイムから浦城へ「12 月 29 日付小包受け取った」と手紙があった。

**1989. 1. 31** ハイムから浦城へ「151-159 と 19 の解読結果を送る」と手紙があった。

**1989. 2. 18** ハイムから浦城へ「151-159 と 19 の解読結果を送った」と繰り返しのほか「(1)1

月 28 日 手紙と郵便クーポン 10 枚 (2)2 月 11 日大きな手紙 (3)贈り物を受け取った」と手紙に書かれていた。

**1989. 3. 12** ハイムから浦城への書簡。内容は、解読結果の送付についてであった。

**1989. 4. 1** 兼子が、日刊工業新聞福井支局長から大阪支社へ転勤した。

**1989. 5. 14** ハイムから浦城へ「4 月 22 日付手紙、贈り物のお礼」の手紙であった。

**1989. 11. 26** ハイムから浦城へお礼ほかの内容の手紙があった。

**1990. 4. 27** ハイムから浦城への書簡があった。このころハイムの解読が完了したと思われる。

### **1990. 10. 3 東西ドイツ統一**

**1991** 浦城は「障壁は 1988 年に完全に取り払われた。1988 年から 1991 年にかけて彼の解読結果を受け取った。」と宣言した。

**1993. 3. 22** 伊東光晴、根井雅弘著「シュンペーター」が岩波新書から発行された。

**1995. 6. 27** 新年度初に、東畑記念館にあった東畑文庫は三重県立図書館に設けられた東畑文庫へ移管される契約が成立したのを受けて、作業に当たる予定の森川 (Shigeyuki Morikawa, 当時三重県立高校教師) が県立図書館へ出向していた。

この日、三重県農業技術センターと三重県立図書館で、浦城、森川らが加わり、東畑の蔵書移転に関する打ち合わせを行った。図書分類(日本十進法)に依拠して蔵書類を細分類しながら徐々に県立図書館へ移動作業を開始した。

**1996. 3. 19** この日をもって移管は完了した。

東畑精一の蔵書類の移管は、以下のとおり。農水省農業総合研究所=5, 000 余冊、東京農業大学=約 650 冊、鯉淵学園=約 950 冊、三重県=約 14, 000 冊

**2001 夏** 初めて今井 Katsuhiko Imai が浦城からシュンペーター著「資本主義・社会主義・民主主義」の遺稿研究の話題を聞いた。

これより前に「四者綴じ合わせ 600 部を作成した。2、3 回配列を修正した。」とある。(浦城)

**2005** 東畑の蔵書を整理した森川は、東畑の関係資料を「近現代日本人物史料情報辞典 2」(2005 年版、吉川弘文館)に記載した。

**2014. 7** 今井が、浦城からシュンペーター著『補遺稿「資本主義・社会主義・民主主義」シュムペーター章句集成』稿をタイプ打ちした日本語訳を初めて見る機会を得た。

**2014. 9** 今井は原語版、和訳版のワープロ入力を開始、校正を 2015 年 10 月末までにそれぞれ完了した。

**2015. 12. 5** 『補遺稿「資本主義・社会主義・民主主義」シュムペーター章句集成』の出版記念会が三重県津市の津都ホテルで開かれた。兼子が司会した。

**2016. 1. 6** ケーラーがライブツィッヒで死去した。(最高速記速度記録は 540 音節/1 分間×11 分、11 カ国語の多言語速記チャンピオン(ドイツ語、ポーランド語、チェコ語、スロバキア語、ロシア語、ブルガリア語、ハンガリー語、イタリア語、英語、オランダ語、インターリングア)。「ステノライオン」の異名を持つ。(彼の記録は 2001 年、17 言語を速記したボリス・ノイバウアー Boris Neubauer よって破られている)

2016. 7. 31 兼子が桑原みなみの協力を得て、シュンペーターの遺稿資料すべてを整理し、電子化した。

2016. 11. 18 兼子が桑原を伴って一橋大学図書館を訪問し、電子データ一式を寄贈した。

2017. 2 桑原は関西学院大学文学部の卒業論文「ドイツ語の速記とその文化（副題：～シュンペーターの文化活動と速記リテラシー～）」を提出していたが、単位を与えられた。

2017. 7. 25 ベルリンで開かれた第 51 回インテルステノコンGRESSのカンファレンスにおいて兼子は「ドイツ草書派理論の日本語、中国語、朝鮮語、インドネシア語への伝播とシュンペーターの速記メモの解読事業」について口頭報告した。あわせてシュンペーターの手書き草稿、速記メモ、解読票、浦城の編集した原語版、日本語への翻訳版を電子データ化した DVD を約 80 枚作成して世界各国からの参加者に無料配布した。

## 出典・参考文献・情報等

### 【注】

\* 1 : 『ヨセフ・アロイス・シュムペーター補遺稿「資本主義・社会主義・民主主義」シュムペーター章句集成』, p. 555-560.

\* 2 : 『J. A. シュンペーター” Capitalism, Socialism and Democracy” のマニュスクリプトの存在と由来』, p. 39-42.

\* 3 : 京都速記研究所「速記研究」95号, p. 2.

\* 4 : 「日本語速記術発表 90 周年記念速記の歴史」. 向井征二, p. 62.

\* 5 : 「速記文化 13 号」, 1966. 12. 10, 北川暉基, 全日本学生速記連盟, p. 34-35.

\* 6 : 「中国速記百年史」. 2000. 7, p. 93.

### (参考文献・資料、情報源)

「資本主義・社会主義・民主主義」補遺稿・章句集電子版公開サイト（三重県立図書館）:

<http://www.library.pref.mie.lg.jp/>

『速記・研究と回顧』, 1952. 9. 20, 近畿速記士連盟.

『速記の歴史』, 1973. 3. 1, 日本速記協会, 向井征二.

『日本速記方式発達史』, 1942. 11. 25, 日本書房, 武部良明.

『速記概論』, 1979. 4. 20, 大阪早稲田速記専門学校, 兼子次生.

『万国速記史』, 1980. 5. 18, 大阪早稲田速記専門学校, 兼子次生.

『速記研究』, 1990, 速記文化研究所, 兼子次生.

『速記文化』, 1966. 12. 10, 全日本学生速記連盟, 北川暉基.

『京都速記研究所・速記研究』, 森卓明.

『衆議院式標準速記法原理』, 1950. 5. 15, 西来路秀男.

『毛利式速記術』, 1922. 8. 8, 毛利高範.

『Intersteno 日本語速記入門』, 1959, 10. 1, 大場

格.

『Intersteno 国際速記入門』, 2000. 10. 10, F. De Kunowski.

『スピードメモ法』, 1992. 5. 27, 中根正雄.

『速記』, 1964. 9. 29, 三村侑弘.

『ヨセフ・アロイス・シュムペーター補遺稿「資本主義・社会主義・民主主義」シュムペーター章句集成』, 2015. 12. 5, 編者浦城晋一, 副編者今井克彦.

『J. A. Schumpeter “Capitalism, Socialism and Democracy” のマニュスクリプトの存在と由来—とくに東畑精一との関連において—』, 浦城晋一, 木南章.

『資本主義・社会主義・民主主義補遺稿・章句集成』電子データ

(中国語)

『中国速記百年史』2000. 7, 唐亜偉主編.

『速記人生回憶録』2005. 10, 顔廷超.

『速記符号学概論』2005. 8, 顔廷超.

『中文速記略法学』2005. 8, 顔廷超.

『速記発展簡史』1977. 8. 25, 顔廷超.

(その他言語)

"Geschichte der Kurzschrift", 1974, Arthur Mentz und Fritz Haeger.

"History of Shorthand Fourth edition", Isaac Pitman.

"Stenographie", 1890, Albert Navarre.

"Kurzer Lehrgang Der Deutschen Kurzschrift I Teil", 1978, Hans Lambrich.

"Art und Bau der wichtigften Kurzschriften", 1988. Beate Sander-Jaenicke und Hans Karpenstein.

"Lebendige Kurzschriftgeschichte", 1979, Dr. Franz Moser und Dr. Karl Erbach.

Dejiny Tesnopisu, 1973, \_Jan Petrsek, 197p.

"La Stenographie dans le Monde", 1965, Marcel et Rene Racine.

"Shorthand Alphabets for English, Latin and Greek", 1791. Simon Bordley.

"Roe's Radiography of Improved Short-Hand", 1821, Richard Roe. "Key to Complete Manual of Cursive Phonography", 1930, George A. S. Oliver.

"Stenographia", 1975, V. V. Gerasimov.

"Encyclopedia Italiana".

"Collier's Encyclopedia".

"Encyclopedia Americana".

"Russian Encyclopedia".

〒618-0012 大阪府三島郡島本町高浜 2-22-5  
Tsuguo.kaneko atmark gmail.com Tsuguo Kaneko